



今後の

社会の変化に

対応した

多様な

体験活動事例集

はじめに

今、我が国は、「人生100年時代」や「超スマート社会（Society5.0）」と言われる変化の激しい時代を迎えています。こうした社会の大転換を乗り越え、一人一人が豊かに生きていくためには、生涯にわたって質の高い学びを重ねて、成長し、多様な他者と協働しつつ、感性や創造性を発揮して新たな価値を生み出す力を身に付けることが必要であり、教育が果たす役割は大きいと考えます。

平成30年6月に閣議決定された「第3期教育振興基本計画」においては、「子供の健やかな成長のためには、豊かな心を育むことが不可欠であり、このため、豊かな情操や規範意識、自他の生命の尊重、自己肯定感・自己有用感、他者への思いやり、対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力、困難を乗り越え、物事を成し遂げる力、公共の精神等の育成を図るとともに、日本の伝統や文化を継承・発展させるための教育を推進することが重要である。」とされており、社会体験活動や自然体験活動等も含め、児童生徒の多様な体験活動の機会を充実することの必要性を求めています。

文部科学省では、上記の経緯を踏まえ、「今後の社会の変化に対応した様々な体験活動事例集」を取りまとめました。

この事例集には、各都道府県・政令指定都市・市区町村が実施する推薦事例の中から特色ある事例を選定し、「農林漁業の理解を深める体験活動」「多文化共生（ダイバーシティ）の意識を高める活動」「地域間交流・地域間協働を推進する体験活動」「主権者意識を高める活動」「様々な環境下で幼児の主体性を育む体験活動」の区分ごとに掲載しております。

事例集の発行に当たり、事例の推薦・執筆に御協力いただきました関係者の皆様、事例の選定に御協力いただきました有識者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本事例集が、社会全体で体験活動の様々な機会を創出し、推進する契機となれば幸いです。

令和2年3月

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課

農林漁業の理解を深める体験活動

事業・活動名	地域	活動の対象者・参加者								掲載ページ
		幼児	小学生 低学年	小学生 高学年	中学生	高校生	大学生 専門学校 高校生等	30歳未満 の若者	青少年の 保護者	
短期山村留学	島根県大田市	●	●	●	●				●	2
宇佐子ども体験教室（農泊体験）	大分県宇佐市		●	●						3
新潟発 わくわく教育ファーム推進事業 「アグリ・スタディ・プログラム」（農業体験学習プログラム）	新潟県新潟市		●	●	●					4
ジュニアフォレストーズ大作戦	岩手県			●						5
農山村留学	千葉県千葉市			●						6
野沢温泉移動教室	東京都東村山市			●						7
胎内市ふるさと体験学習	新潟県胎内市			●						8
森林環境学習「やまのこ」事業	滋賀県			●						9
自然学校推進事業	兵庫県 兵庫県上郡町			●						10
中山間地域ふるさと体験活動支援事業	鳥取県鳥取市			●						11
マタギの地恵体験学習会	秋田県北秋田市 東京都国立市			●					●	12
草原体験学習	熊本県阿蘇市			●					●	13
セカンドスクール・プレセカンドスクール	東京都武蔵野市			●	●					14
しまの魅力に出会う 日本の宝「しま」交流支援事業（五島市コース）	長崎県 長崎県五島市			●	●					15
漁業体験学習	岩手県洋野町				●					16
農業体験学習	宮城県多賀城市				●					17
「ふれあえVA!福島」民泊体験学習	埼玉県越谷市				●					18
修学旅行での酪農体験	和歌山県				●					19

多文化共生(ダイバーシティ)の意識を高める活動

事業・活動名	地域	活動の対象者・参加者							掲載ページ	
		幼児	小学生 Ⅱ低学年	小学生 Ⅱ高学年	中学生	高校生	大学生・ 専門学校生等	30歳未満の 若者		青少年の 保護者
高萩国際交流の集い	茨城県高萩市	●	●	●	●	●	●	●	●	22
「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室	群馬県	●	●	●	●	●	●	●	●	23
多文化キッズキャンプ	岩手県		●	●	●		●	●	●	24
みなとキャンプ村	東京都港区		●	●	●	●	●	●	●	25
グローバルキャンプ	石川県			●						26
ふっさっ子グローバルヴィレッジ	東京都福生市			●	●					27
シンガポール訪問団と宇城市中学生との交流事業	熊本県 熊本県宇城市				●					28
国際交流サマーキャンプ	新潟県				●	●	●			29
「世界との対話と協働：アジア・オセアニア高校生フォーラム」	和歌山県					●				30
地域における青少年の国際交流推進事業(サマースクール)	宮城県					●	●	●		31

地域間交流・地域間協働を推進する体験活動

事業・活動名	地域	活動の対象者・参加者							掲載ページ	
		幼児	小学生 Ⅱ低学年	小学生 Ⅱ高学年	中学生	高校生	大学生・ 専門学校生等	30歳未満の 若者		青少年の 保護者
南の国の真夏に挑む体験の旅	北海道南富良野町 沖縄県本部町			●						34
多良間村就業意識向上支援事業	沖縄県多良間村 沖縄県			●	●					35
洋野町青少年交流事業	岩手県洋野町 沖縄県金武町・北海道浦幌町			●	●				●	36
富士市青少年体験交流事業 キズナ無限∞の島	静岡県富士市 宮城県気仙沼市				●	●	●	●		37

主権者意識を高める活動

事業・活動名	地域	活動の対象者・参加者							掲載ページ	
		幼児	小学生 Ⅱ低学年	小学生 Ⅱ高学年	中学生	高校生	大学生 専門学校生等	30歳未満の若者		青少年の保護者
にこにこシティいわくら	愛知県岩倉市		●	●	●	●	●			40
あしやキッズスクエア（放課後子供教室事業） 体験プログラム	兵庫県芦屋市		●	●		●				41
平川市子ども議会	青森県平川市			●						42
子ども議会 ～みんなが住み続けたい千葉市にするために～	千葉県千葉市			●	●					43
酒々井学プログラム「酒々井のまちづくり」	千葉県酒々井町			●	●					44
甲賀市子ども議会	滋賀県甲賀市			●	●					45
川崎市子ども会議	神奈川県川崎市			●	●	●				46
子ども地域学習推進事業（森の子ども会議）	高知県			●	●	●	●			47
こども未来会議室	千葉県船橋市				●					48
中学生議会	島根県隠岐の島町				●					49
長井市まちづくり少年議会	山形県長井市				●	●				50
茅野市ぼくらの未来プロジェクト	長野県茅野市				●	●				51
揖斐ジモト大学	岐阜県揖斐川町				●	●				52
こなん政策アカデミー	滋賀県湖南市				●	●	●	●	●	53
生涯学習講座「高校生議会」	愛知県弥富市					●				54
高校生による投票事務従事体験及び 選挙啓発活動	福岡県福岡市					●				55

様々な環境下で幼児の主体性を育む体験活動

事業・活動名	地域	活動の対象者・参加者							掲載ページ
		幼児	小学生Ⅱ低学年	小学生Ⅱ高学年	中学生以上	青少年の保護者	自然体験	生活・文化体験	
もりっこ	神奈川県	●					●		58
森のようちえん もくもく	熊本県	●					●		59
乳幼児を対象とした文化・芸術体験事業	東京都世田谷区	●						●	60
綱づくり体験 ちびっこ綱武士!	沖縄県与那原町	●						●	61
森のようちえん「たこたこくらぶ」	兵庫県明石市	●					●	●	62
食育ネットワーク事業	北海道土幌町	●						●	63
あひるクラブ	長野県原村	●					●	●	64
かわさき森のようちえん/ 【親子】かわさき森のようちえん	神奈川県川崎市	●				●	●		65
食育教室	兵庫県養父市	●				●		●	66
槇島ほうきの伝統を体験する	山形県庄内町	●				●	●	●	67
ひのき教室	千葉県野田市	●				●	●	●	68
はやしまプレーパーク	岡山県早島町	●				●	●	●	69
森の保育園	岩手県住田町	●			●	●	●		70
家族ふれあい広場 「われらネイパルファミリー ～お泊まり編～」	北海道	●	●			●		●	71
鬼っこわんぱく講座 鬼剣舞体験	岩手県北上市	●	●	●				●	72
地域子ども教室 田んぼの学校	岐阜県御高町	●	●	●		●	●		73
たねさし 星のW☆RLD ～春・夏・秋・冬物語～	青森県	●	●	●	●	●	●		74
親子自然観察会	香川県土庄町	●	●	●	●	●	●		75
孺恋クリーン大作戦	群馬県孺恋村	●	●	●	●	●		●	76

掲載事例について

事例集の作成に当たっては、各都道府県・政令指定都市・市区町村から推薦された事例の中から、下記観点を基に特色ある事例を選定しました。

対象とした活動の範囲

- 「体験活動」とは、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」と定義しています。具体的には、生活・文化体験活動（例：放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事）、自然体験活動（例：登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に係る学習活動）、社会体験活動（例：ボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ）の3つに分類されます。
- 「青少年」は、幼児～概ね30歳までを指すものとします。
- 下記a)～c)のいずれかに該当し、主として教育委員会が行っている取組を対象としています。
 - a) 教育委員会及び学校が企画・運営をしていること
 - b) 教育委員会が他機関に委託・助成をしていること
 - c) 他機関が主催し、教育委員会との連携により実施されていること

※他機関とは、首長部局、青少年教育施設、他の公共施設、大学、NPO、子ども会、青年団、青年会議所、議会、選挙管理委員会、民間企業等としています。

掲載事例のテーマ

- 下記ア)～オ)に該当する事例を選定しました。
 - ア) 農林漁業の理解を深める体験活動
 - 小学生～高校生を対象とし、農業・林業・漁業等の体験を伴う活動
 - 宿泊を伴う活動
 - 学校教育での活動・社会教育での活動の両方を対象とし、修学旅行に農林漁業体験活動を含むものや、農家での民泊を伴う活動など
 - イ) 多文化共生（ダイバーシティ）の意識を高める活動
 - 国籍を問わず、青少年及びその保護者を対象とし、日本国内で実施された活動
 - 宿泊を伴う活動
 - 「異文化交流や協働を促すワークショップ」、「外国にルーツを持つ青少年が日本文化を理解するためのキャンプ」、「宿泊等を伴う日本語教室等の活動」など
 - ウ) 主権者意識を高める活動
 - 青少年及びその保護者を対象とし、社会の構成員の一員として、現実にある課題等について自らの問題として主体的に考え、行動する活動など
 - 家庭や地域との連携・協働による活動など
 - 投票への啓発を目的とした活動だけでなく、「子供議会」、「まちづくり」、「地域の課題解決」などに関係する取組、「児童館」や「ユースセンター」等を利用した取組など
 - エ) 様々な環境下で幼児の主体性を育む活動
 - 幼児及びその保護者を対象とし、幼稚園や保育園、青少年体験施設等で実施する活動
 - 活動そのものが目的ではなく、単発的なイベントではない継続的な取組など
 - 自然体験活動（野外活動・動植物観察等）、生活・文化体験活動（遊び、お手伝い、伝統文化の体験等）、社会体験活動（ボランティア、奉仕活動等）など
 - オ) 地域間交流・地域間協働を推進する体験活動
 - ア)「農林漁業の理解を深める体験活動」、イ)「多文化共生（ダイバーシティ）の意識を高める活動」両方のテーマにまたがる活動

その他

- 一部の事例にて固有の名称等を用いていることにより、標記を統一していない文言があります。
- 令和元年度に活動を実施している事例を掲載対象としていますが、過年度の活動や例年の活動状況を紹介している事例もあります。



農林漁業の理解を深める体験活動



短期山村留学

大田市教育委員会・大田市山村留学センター

【島根県】

活動概要

- 対象 保護者同伴の幼児・小学生・中学生(公募、全国各地から参加)
- 参加人数 短期山村留学 約220名(この他、約10名の長期山村留学も実施)
- 活動時期 春季(1泊2日、4泊5日)、夏季(11泊12日、4泊5日、1泊2日)、冬季(4泊5日、1泊2日)【令和元年度】
- 活動場所 大田市山村留学センター「こだま学園」ならびに大田市内の各地域
- 連携協力 公益財団法人育てる会

背景・目的

- 少子化と子供たちを取り巻く環境の変化(外遊びの減少、忙しさ)を現代社会の課題として捉え、都市部の子供たちと農山村の子供たち、又は、都市部と農山村との間で相互にメリットが生まれる方策について、様々な人が意見を出し合い、平成8年に山村留学事業を開始した。
- 従来の「山村留学＝過疎地域の小規模校対策」という枠組みを越え、「次世代を担う人づくり事業」として、生き抜く力の育成を目的に実施。

主な取組

短期山村留学では、子供の休暇(土・日や夏・冬・春休みなど)を利用して、数日から2週間程度の期間に、農山村集落・高原・海という大田の魅力あふれる自然や地域の文化素材を活用した様々な体験活動と、農家へのホームステイを実施。

(夏季の活動例)

- 【1日目・2日目】友達を作ろう、三瓶を歩こう
- 【3日目～6日目】川で遊ぼう、魚を釣ろう、海で遊ぼう
- 【7日目】食文化体験(こんにゃく作り、豆腐作り)
- 【8日目・9日目】農山漁村生活体験(農家宿泊、畜産体験、漁業体験、稲作体験等)
- 【10日目・11日目】工作(木工細工、竹細工)、石見銀山見学、登山、自然観察等
- 【12日目・13日目】お別れ会、活動のまとめ



特徴

農家へのホームステイで、都会の子供も、農山漁村の子供も、地域住民の方の優しさと厳しさと伝統的な生活や文化に触れる

大田市の地理的条件を活かして、海と山両方の自然体験活動をふんだんに取り入れ、魅力あふれる自然や文化などの他の地域にない優れた教育的資源を活かし、子供たちのたくましく生き抜く力を養っている。

農家でのホームステイでは、優しさや厳しさに触れながら、野菜の収穫、風呂たきなど、家族の一員になって様々な農山村の生活体験をしている。

成果・展望

中山間地で実験的に短期山村留学に着手し、都市と地方の子供たちとその保護者の交流が育まれ、その延長として1年間(通年)の長期山村留学制度の導入に至っている。

自然体験と里山生活という資源が有効に活用されており、子供たちの活動や交流を通して地元にも活力が涵養されてきた。

宇佐子ども体験教室(農泊体験)

宇佐市教育委員会・四日市公民館

【大分県】

活動概要

- 対象 市内小学校の3・4年生（全ての対象児童に学校経由でチラシを配布）
- 参加人数 28人【令和元年度】
- 活動時期 活動全体では6月から翌年1月の計8回実施、7月に農泊体験（1泊2日）
- 活動場所 四日市公民館が主だが、農泊時は受け入れ家庭にて行う（令和元年度7家庭）
- 連携協力 NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会（農泊体験について）

背景目的

- 高齢者・女性以外を対象にした公民館の学級活動がなかったため、平成10年に小学5・6年生を対象とした現子ども体験教室の前身である「わんぱく体験隊」が企画、実施された。以来、対象児童の学年を3・4年生に変更し活動を実施している。
- 農泊については、農作業等で汗を流して働くことの大切さを学んだり、収穫した野菜などを使った料理作りをしたりと、日常生活や学校生活では体験できない、農村ならではの体験をさせることを目的として実施。（平成21年より実施）

主な取組

心豊かな感性を持った子どもを育てるため、主に市内において農泊・木工・歴史学習等の体験活動を実施。農泊体験では、1泊2日で、野菜の収穫や種まき、牛の世話等の農業体験や、川遊び、おやつやおもち作り等を経験する。なお、農泊で主に収穫体験をできるようにするため、例年7月に実施している。

実施に当たってはNPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会と連携。慣れない場での農作業・食事・宿泊等、子どもたちの命に関わる重大なリスクを伴う体験となるため、緊急時の対応等に留意の上実施している。



特徴

保護者と離れて、市の多様な地理的・社会的環境を知り、自分で考えて行動することを学ぶ

農泊体験は、四日市公民館の所在する旧宇佐市地域でなく旧安心院町・院内町で行うため、市の多様な地理的・社会的環境を子どもたちが知る貴重な機会となっている。

初めて保護者の元を離れて宿泊する子どもや、初めて会う方の家庭に宿泊する子どももあり、様々な農村での活動を通して、豊かな感性を身に付けることができている。さらに、マナーや友達との関わり、工夫することや我慢することなど社会性も学んでいる。

成果・展望

教室での新たな人間関係の構築、及び、これまでの日常生活や学校教育では知り得なかった知識に触れて感性を刺激される体験を通じ、閉講時には大いに精神面で成長している。

新潟発 わくわく教育ファーム推進事業「アグリ・スタディ・プログラム」 (農業体験学習プログラム) 新潟市・新潟市教育委員会

【新潟県】

活動概要

- 対象 市内小学生、中学生（学校にプログラムの冊子を配布、学校から申込み）
- 参加人数 学校ごとの希望人数（最大宿泊数70人まで）
- 活動時期 通年で1泊2日、令和元年度は小中合わせて25校が4月～10月に実施
- 活動場所 公立教育ファーム 新潟市アグリパーク
- 連携協力 新潟市教育委員会学校支援課・新潟市農林水産部食と花の推進課

背景目的

- 農業が盛んな特徴を活かし、「田園型政令市」を目指す中、農業が身近にある環境の中で市内の小中学校が農業体験学習を実施することで、新潟市が誇る農業や食に対する理解を深め、ふるさとへの愛情や誇りを育むとともに、子供たちの「生きる力」を高めることをねらいとしている。（平成26年度より実施）

主な取組

搾乳体験や畑の耕起体験、野菜の収穫・調理体験、生ごみのたい肥化や果樹栽培に関するプログラム等を、各学校のねらいに即した流れになるように組み合わせて実施する。

（令和元年度に実施した小学5年生の取組の例）

ねらい：農業・農産物加工・食に触れる体験を通して、農業についての理解を深め、命の恵みについて学ぶ。

【1日目】「野菜収穫→石窯ピザ作り→生ごみのたい肥化の体験」で、学校における野菜作りと対比しながら、循環型の農業について学ぶ。

「羊とのふれあい→ウィンナー作り体験」で、人が生きていくために動物の命を頂くことを学ぶ。

【2日目】「畜舎の清掃→搾乳→牛へのえさやり→牛乳試飲・アイスクリーム作り体験→酪農家のお話」で、子牛のためのお乳や牛の命を頂いていること、そのために酪農家は努力をしていることを学ぶ。

最後に2日間のまとめと振り返りをする。



特徴

様々な教科と農業体験を結び付けて、学習指導要領上の位置付けを明確にしたプログラム

このプログラムは、知識と体験を結び付けて確実な学びを実現するために、5つのことを大切に編成されている。

- A 五感を通して学ぶことで、自分の感覚と知識を結び付ける
- B 「育てる」と「消費する」を結び付けて学習する
- C 働くことを通して学ぶことでキャリア意識を持たせる
- D 「アクティブ・ラーニング」で学ぶことで深い学びを実現する
- E 専門家に学ぶことで、農業を支える「人」に気付かせる

成果・展望

実施した学校のアンケートから、「食に対する感謝の気持ち」「農業への関心」「農家への尊敬の気持ち」の高まりが成果として挙げられている。

<具体的な内容の一部>

- ・日々の生活では当たり前と感じている食について、「本物」と関わることで、命の尊さを感じ、命の恵みを実感できた。
- ・作業は思った以上に大変だが、その分達成感ややりがい大きい。後継者問題など考えていかなければならないが、若い人も頑張っていて、農業も進化していることが分かった。

ジュニアフォレスターズ大作戦

岩手県教育委員会

【岩手県】

活動概要

- 対象 県内小学校の4～6年生（学校を通じてチラシを配布して募集）
- 参加人数 40人程度
- 活動時期 年間登録制：1泊2日×3回実施（6月、9月、1月）
- 活動場所 岩手県立県北青少年の家
- 連携協力 林野庁東北森林管理局岩手北部森林管理署、県北広域振興局農政部二戸農林振興センター林務部、馬淵川上流域森林・林業活性化センター、二戸市浄法寺支所漆産業課

背景・目的

- 森林に関する学習や体験活動等を季節ごとに行うことにより、自然を大切にする心を育み、環境保全の実践意欲を育てることをねらいとしている。（平成12年度より実施）

主な取組

令和元年度は「森林と人との関わりについて」をテーマとし、森林に関する学習やフィールドワークの活動を組み合わせて実施。

年間3回の活動において、例えば第1回に栽培した野菜を第2回で収穫し、調理実習の食材として利用したり、座学で学んだ「うるし」を使ってのストラップ創作等の活動を実施。

（令和元年度第2回の活動内容）

【学 習】《うるしは すごいのだ》

【体 験】二戸市浄法寺町滴生舎周辺のフィールドワーク

【栽培採集】収穫「野菜をとろう」

（第1回で苗植え・種まきした野菜を収穫）

【調理実習】～トマトソース・パスタ～「収穫野菜を使ってつくる」

【そ の 他】「うるしストラップ創作」「キャンプファイヤーと花火」



特徴

「森林」をテーマに、「学習」「体験」「栽培採集」「調理実習」等を相互に関連付けた計画的なプログラムを実施

年間テーマを設け、それに迫るプログラムを企画。環境に加えて、地域や人にも目を向けるきっかけになるように内容を工夫している。

年間3回の活動だけでなく、3年間、合計9回体系的に学ぶ子供も多い。

成果・展望

森林の大切さに加え、人との関わりについて意識が高まっている。

森林が私たちを守り、私たちが森林を守り、育てる。子供たちは、互いに支え合いながら、共生していることを感じている。

また、森林関係に従事する方々への感謝の気持ちを新たにした子供たちが多く見られた。

農山村留学

千葉市教育委員会

【千葉県】

活動概要

- 対象 全市立小学校の6年生（全校111校悉皆）
- 参加人数 計8,310人【令和元年度】
- 活動時期 5月～10月、2泊3日か3泊4日
- 活動場所 千葉市少年自然の家、千葉県立鴨川青年の家、南房総市大房岬自然の家、他
- 連携協力 千葉市少年自然の家、南房総市観光協会、鴨川観光プラットフォーム株式会社

背景目的

- 多くの人々との交流を通して、人間関係を広げる中で、子供たちの他人を思いやる心や社会性を育成する。
- 農業や林業、漁業などにつながるような活動や、地域の自然や文化に触れる様々な体験活動を通して、児童の自主性や創造性を伸ばす。
- 日常とは異なる生活環境において、自分の住む町や千葉市、自分の家族について見つめ直し、考える機会とする。（平成17年度より市内全校で実施）

主な取組

（活動の実践例【鴨川の伝統を生かした活動】）

鴨川にある伝統文化を体験させるために「萬祝染体験」（千葉県指定伝統的工芸品の染物体験）や「せんべい焼き体験」を実施。また、5～7名のグループに分かれ、農家に宿泊して農業体験活動を行った。

実際に畑を耕したり作物を収穫したりするなど、普段は体験できない農業に関わる作業を体験的に学習することができた。また、収穫した野菜や果物を民泊先の家族の方と調理し、一緒に食べることで、食に関する感謝の気持ち及び食材や調理に関する興味を持つことができた。

特徴

日常とは違う経験の中で、友達と一緒にいろいろなことを学び、成長する

教室を移して宿泊体験を行うことで、自分を見つめ直し、友達との関わり方を考え、行動できるようにするという目的を理解させて実施。

【鴨川の伝統を生かした活動】では、鴨川の伝統文化をしっかりと体験できるように講師の方と活動人数や実施方法などを話し合った。また、「体験学習のてびき」（市教委作成）の活用を広め、充実した活動内容となるように支援している。



成果・展望

萬祝染を体験したことで、伝統文化について関心が高まった。千葉県には他にどのような伝統文化があるのか、調べようとしている児童もいた。地域の方たちの生活や農作業について学べ、良い経験となっている。農山村留学以降、家でも料理を自ら進んでするなど成長が見られている。

野沢温泉移動教室

東村山市立八坂小学校・東村山市立秋津小学校・東村山市立萩山小学校 【東京都】

活動概要

- 対象 各小学校の6年生（移動教室）
- 参加人数 八坂小学校130人、秋津小学校102人、萩山小学校64人【令和元年度】
- 活動時期 6月から7月、3泊4日
- 活動場所 長野県野沢温泉村、民宿
- 連携協力 野沢温泉観光協会

背景目的

- 宿泊先のオーナーである「野沢温泉のお父さん、お母さん」（宿舎のご夫婦）との生活を軸とした民泊型の移動教室で、農業体験をしたり地元の人々と触れ合ったりする中で自立性を養うとともに、子供たち同士の助け合いや絆を深めることを通して、地元である東村山市の再発見につなげる。（八坂小学校は平成30年度、秋津小学校は平成28年度、萩山小学校は平成23年度より実施）
- 多数のオリンピックを輩出している自治体であり、オリンピック・パラリンピック教育についての関心を高める。

主な取組

3泊4日の日程の中で、民泊による生活、共同浴場巡り、植林（ブナの植樹）、農業体験（野菜の収穫、野沢菜摘み）、村の伝統工芸品である「つる細工」作り、オリンピックとの交流などを体験。ブナの植樹は100年後にブナ林が復活していることを願って実施。摘んだ野沢菜は麻釜（おがま 源泉）で茹で、昼食で食べることも経験する。

（日程例）

- 1日目 民宿の方との出会いの会、間伐材を利用した名札制作
- 2日目 農業体験、山登り、植林、道祖神（村の守り神）作り
- 3日目 農業体験、つる細工作り、オリンピックとの交流
- 4日目 朧月夜の館で「ふるさと」斉唱、民宿の方との別れの会



特徴

地域の特性や文化などを比較することで、地域への愛着が高まる

民宿での交流会では、子供たちが住んでいる東村山の特色について「野沢温泉のお父さん、お母さん」に発表。東村山市と野沢温泉村との地域の特性や文化などを比較する経験をする。



成果・展望

植樹することにより山の環境が良くなり、ひいてはそれが川を辿って海へも影響を及ぼすことを知ることで環境問題についての関心が高まり、持続可能な開発目標についても考えることができる。環境とパートナーシップを通して野沢温泉と地元である東村山市の未来について思考を巡らし、次代を担う人材を育成できる。

胎内市ふるさと体験学習

胎内市・胎内市教育委員会

【新潟県】

活動概要

- 対象 市内全小学校の5年生（5校、授業の一環）
- 参加人数 年次により変動
- 活動時期 7月下旬から9月上旬までの2泊3日（うち、1泊集団宿泊、1泊農家民泊）
- 活動場所 集団宿泊：新潟県少年自然の家（胎内市内）等、農家民泊：市内各受入民家
- 連携協力 胎内型ツーリズム推進協議会301人会（事務局：胎内市農林水産課）

背景・目的

- 平成19年6月に市を事務局として「胎内型ツーリズム推進協議会301人会」が発足。様々なグリーン・ツーリズム事業を展開する中で、重点事業の1つとして開始。
- 平成20年に市内全小学校の5年生を対象に行う学校の総合学習の一環として始まった事業であり、“地域子どもたちは地域でしっかり育てる”ことをモットーとしている。

主な取組

新潟県少年自然の家での集団宿泊に加えて、1軒あたり4名程度で市内全域の、山間部から平野部まで様々な地域での農村生活体験（農泊）を行う。

農村生活体験では、子どもたちはその時季ならではの農作業の機会、料理の機会、団らんの機会からなる「3つの機会」を体験する。

また、微細米粉発祥の地を掲げる胎内市では、総合学習の一環として米粉に関する食体験を活動内容に組み込んでいる。



特徴

市内で、集団宿泊体験・農泊体験・多様なプログラムの体験活動を全て実施

市内で全てが完結するこの活動を通し、地域の魅力、人の魅力、ふるさとへの誇りの醸成などを体感することで、“教育・共育・郷育”の3つの“きょういく”を成果指針として実施している。

地域循環型の事業として、地域、学校、行政が一体となって進めており、市内の自然に触れるカヌー体験やブナ林トレッキング、星空観察等をはじめ、特産品、観光施設を活用した体験活動を実施し、子どもたちは地域への理解とふるさとの素晴らしさを体感することができる。

成果・展望

実施後のアンケートでは、子どもたちのほとんどが胎内市のよさに気づき、今までよりもっと好きになったと回答。

学校側からは子どもたちの事後の学校生活の様子が明らかに変わった、友達と協力して物事を進められるようになったなど様々な意見が寄せられている。保護者からも、自分のことは自分でできるようになった、責任感が強くなった、食事の好き嫌いがなくなったなど、普段の学校生活では習得し得ない多様な学習効果がもたらされている。

森林環境学習「やまのこ」事業

滋賀県

【滋賀県】

活動概要

- 対象 県内小学校の4年生（学校ごとに実施希望施設や参加希望日程を提出）
- 参加人数 225校、13,383人【平成30年度】
- 活動時期 各学校と調整、日帰り（終日）又は1泊2日を学校ごとに選択
- 活動場所 葛川少年自然の家(大津市)、自然体験学習センター森の未来館（栗東市）、みなくち子どもの森（甲賀市）、河辺いきものの森（東近江市）、荒神山自然の家（彦根市）、高取山ふれあい公園（多賀町）、高山キャンプ場（長浜市）、森林公園くつきの森（高島市）、滋賀県立近江富士花緑公園（野洲市）から学校が選択
- 連携協力 市町教育委員会、国立・私立小学校、特別支援学校、各種学校等、やまのこ事業受入施設を所管する市町等部局

背景・目的

- 次代を担う子どもたちが、森林への理解と関心を深めるとともに、人と豊かに関わる力を育むため、学校教育の一環として、森林環境学習施設及びその周辺林で体験型の学習を実施。（平成19年度より全県実施）

主な取組

以下のような活動を実施。また、体験活動の効果を高めるため、学校で事前・事後学習を実施。

【森に親しむ学習】

森林ウォーキング、樹木観察、自然体験ゲーム、植物の標本作り、植物スケッチ、森林の中でのレクリエーション、木登り体験、等

【森づくり体験学習】

間伐体験、間伐材搬出、枝打ち体験、植樹、下草刈り、ドングリなどの苗木作り、里山整備体験、竹林整備体験、等

【森の恵み利用学習】

間伐材を利用した工作、森の木の実や葉などを使ったクラフト、きのこ採集、きのこ栽培、昆虫飼育、薪作り、炭焼き体験、薪炭を使った調理、等

【森のレクチャー】

山の仕事に携わる人の話、山村文化体験、溪流の水質調べ、等



特徴

「やまのこ」は五感で学ぶ、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）である

子どもたちが、自ら森林に入って活動することで、本から得た知識や教室での学びが生きて働く知識になる。また、仲間と協力することが欠かせない森林での活動を通じて、対話が生じ、協調性が磨かれる。

成果・展望

「やまのこ」事業での学習成果を小学5年生で実施する「うみのこ」事業へとつなげる「やまのこ」を琵琶湖と森林をつなぐ体験学習として実施し、「うみのこ」とともに、探究的・協働的な学習を推進。（「うみのこ」：県内小学5年生全員を対象に、学習船「うみのこ」船上等で宿泊体験型のびわ湖環境学習を実施）

体感することで関心が高まり、森林や自然環境を大切にしたいと思う気持ちが育まれる。実際に森林に入ること、樹木や草花、あるいは森に住む生き物等への興味が高まり、森林の働きや重要性について主体的に学ぶことができる。自ら進んで学ぶことで森林を好意的に捉え、大切に守っていくという意識が芽生える。

自然学校推進事業

兵庫県教育委員会(上郡町教育委員会)

【兵庫県】

活動概要

- 対象 県内公立小学校の5年生及び義務教育学校前期課程の5年生
- 参加人数 48,600人【平成30年度】
- 活動時期 4泊5日以上
- 活動場所 兵庫県内施設等（上郡町では西はりま天文台、農場等で実施）
- 連携協力 兵庫県教育委員会及び市町教育委員会、県内野外活動施設、体験活動実施施設等

背景目的

- 学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し、児童が人や自然、地域社会と触れ合い、理解を深めるなど、長期宿泊体験を通して、自分で考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力や、生命に対する畏敬の念、感動する心、ともに生きる心を育むなど、「生きる力」を育成することを目的とする。
- 県の補助事業として、各自治体の小学5年生を対象に実施。（昭和63年度より実施）

主な取組

豊かな自然の中で長期宿泊体験活動を実施し、日常生活ではできない感動等を体験。施設に宿泊し、周辺の自然についての学習や地域との関わりのある活動を行う。

一例として、上郡町の学校では、学校教育活動全体を通して、食育に関する意識を高め、食の大切さを学び実践できる子供の育成を目指し活動を行っている。

(上郡町での活動例)

- ・ハウス栽培・露地栽培の見学と栽培についての説明
- ・野菜の出荷から流通や販売についての説明
- ・野菜の収穫体験（万願寺唐辛子、ズッキーニ、オクラ等）
- ・その他農作業の手伝い
- ・収穫した野菜の一部などを使った調理実習



特徴

教育課程前後の系統性を踏まえて活動を実施

小学3年生で実施する「環境体験事業」との系統性や関連性を踏まえるとともに、中学校以降における体験活動との系統性やキャリア教育の視点を取り入れ、効果的な活動となるように留意。ねらいを明確にし、自然学校の教育効果を高めるための事前・事後活動の充実に留意して実施している。

成果・展望

農場等で学校では得難い体験活動を行うことで、自然の美しさや神秘性、厳しさなど様々な自然と触れ合い、豊かな感性や知的好奇心を育むとともに、辛いことを我慢したり、友達に相談したりする経験を通して、自分自身や友達の長所・能力などを発見し、人間関係を深める機会となっている。

中山間地域ふるさと体験活動支援事業

鳥取市教育委員会

【鳥取県】

活動概要

- 対象 市内小学生（義務教育学校前期課程を含む）（希望校を募って実施）
- 参加人数 13校、641人【平成30年度】
- 活動時期 年度中・各学校1回・原則1泊以上のまとまった宿泊を含める
- 活動場所 鳥取市佐治町
- 連携協力 五しの里さじ地域協議会

背景目的

- 児童生徒が直接ふるさと鳥取の自然・文化や人々と十分に触れ合う体験活動は、鳥取市教育振興基本計画の基本理念「ふるさとを思い 志をもつ子を育て、夢と希望に満ちた次代を“ひらく！”」を推進するために重要な位置付けにある。
- 「鳥取市中山間地域対策強化方針」が策定されたのを契機として、佐治町の民家での農林家暮らし体験を中心に、林業体験や和紙作り体験などの自然・文化体験について、平成23年度から小学生を対象に実施している。

主な取組

宿泊場所について、最低1泊の民泊を取り入れた計画とし、農林家暮らし体験、林業体験、郷土料理作り体験、魚のつかみどり体験、和紙作り体験、星空観察、お寺の本堂での座禅体験、方言での佐治谷話等の活動を地元住民の協力の下で行う。

林業や自然の素晴らしさ、大切さ、山あいの暮らしのよさを感じ、普段できない体験ができたことへの満足感を味わうことができ、民泊家庭での生活を通して、人の温かさを感じ、自分の家庭での役割を考えることができる。



特徴

市内地域を教育資源として活用し、ふるさとを思う心を持つ子供を育てる

過疎地域のまちづくり協議会、地元企業、住民の協力の下、農山村での生活体験を行い、子供たちに豊かな人間性や社会性を育むとともに、ふるさとの自然や文化の素晴らしさやそこに暮らす人々の温かさを心の原風景として刻み込む。

教育課程上の位置付けを明確にし、学校と五しの里さじ地域協議会との綿密な打合せの上で実施している。



成果・展望

児童アンケート（実施前・実施後）において、アンケート項目の肯定的回答が上昇。「命の大切さやありがたみ」、「ふるさと鳥取の自然の素晴らしさ、大切さ、山あいの暮らしのよさ」、「普段できない体験ができたことへの満足感」、「人と触れ合うこと、友達と協力することの良さや協力できたことへの満足感」等を感じている。

マタギの地恵体験学習会

北秋田市、北秋田市教育委員会、マタギの地恵体験学習実行委員会 【秋田県】

活動概要

- 対象 東京都国立市在住の小学4～6年生（メール、電話、FAXのいずれかで募集）
- 参加人数 児童11人、保護者11人（これ以外に北秋田市が募集した児童31人も参加）【令和元年度】
- 活動時期 夏休み期間に3泊4日で実施
- 活動場所 北秋田市内
- 連携協力 北秋田市、北秋田市教育委員会、マタギの地恵体験学習実行委員会が主催、秋田県教育委員会が共催の事業に国立市の児童が参加

背景目的

- 国立市は、旧合川町(現北秋田市)と長年児童交流を行っており、平成30年10月に教育・文化・経済・観光等の分野において広く市民相互の交流を図ることを目的に、「国立市・北秋田市友好交流都市協定」を締結。
- 児童の新たな学びの機会の提供とともに、北秋田市との文化交流の促進を目的として、北秋田市が実施する事業に国立市の児童も参加できるようにした。（令和元年度より参加）

主な取組

マタギ弟子入り体験として、ニワトリの毛むしり体験や、きりたんぼ作り体験、イワナをさばく体験、山菜の皮むき体験等を実施。ニワトリの毛むしり体験については、まだ温かいニワトリの毛をむしった後、地元の方が解体する様子を見学。マタギの方からは、マタギは余分な狩りは行わず、必要な命を必要な分だけ「授かる」ということや、授かった命は新人マタギもベテランマタギもみんな平等に分け合うという話を聞く。この他、北秋田市と国立市が連携して実施する「都市と山村の友好の森事業」の一環としての植林体験や、伊勢堂岱遺跡縄文館に関する体験学習等を実施。



特徴

文化の違いを体感－北秋田市の農村で命を頂く－

国立市では学ぶことができない北秋田市の文化を体験することで、国立市との文化の違いを体感し、国立市の文化についても改めて興味・関心を持たせている。また、森林環境学習を目的とした植林体験を行うことで、更なる学びの機会につなげている。風習や文化の違いを感じ取って、また、「命の学習」を通じて、生きる知恵について学ぶ。

成果展望

インターネットでは分からないことを、体で感じ学ぶことができている。参加児童から、「命を頂いて生活していることが分かった」「昔の人が生活で様々な工夫をしてすごいと思った」などの感想が寄せられている。

草原体験学習

阿蘇市立内牧小学校

【熊本県】

活動概要

- 対象 市立内牧小学校の4年生（全員参加）
- 参加人数 59人【令和元年度】
- 活動時期 10月8日・10月9日（1泊2日）【令和元年度】
- 活動場所 夢☆大地グリーンバレー
- 連携協力 阿蘇市公民館内牧分館、公益財団法人阿蘇グリーンストック、阿蘇市社会福祉協議会、阿蘇市地域婦人会

背景・目的

- 阿蘇地域では、かつては、草は大切な資源であり、農家の人々が採草地のある草原で、竹の骨組みにススキで屋根を葺いた「草泊まり」を作り、寝泊りしながら草刈りを行っていた。
- こうした先人の取組を体験し、草原を維持していくことの大切さを学ぶ学習の一環として「草泊まり」作りや自然探検等の体験学習に取り組んでいる。（平成25年度より実施）

主な取組

草原を維持してきた先人の取組に学び、「草泊まり」を作り、子供たちが宿泊する体験学習を実施する。

また、体験学習のまとめとして、「千年の草原」という劇を創作し、校内の学習発表会や阿蘇草原再生協議会主催「こども地域学習発表会」において、他学年や保護者及び地域の人たちに学習の成果を発表する。

【事前準備】 「草泊まり」材料準備（竹切り、かや切り）

【1日目】 「草泊まり」作り、自然探検（草原の野草・昆虫観察）、歴史講話（草原の土塁の話）、非常食作り、星空観察

【2日目】 乗馬体験 等



特徴

様々な協力・連携により、地域の自然や歴史を継承する取組として実施

実施に当たっては、地域の様々な団体等、保護者の連携、協力があり、活動の維持にはこれらの団体等の協力が不可欠となっている。他方で、地域にとっても、子供たちに地域の自然や歴史を継承する取組となって定着し、子供たちとの良いふれあいの機会となっている。



成果・展望

阿蘇の自然の下で、規則正しい集団生活を通して、自治共同の精神を養い、心身の健全な発達を図る機会となっている。

草原体験学習を通して、阿蘇の自然の大切さや先人の取組や知恵についての理解が深まり、自分たちの環境を保全していこうとする態度や郷土を愛する心情が育っている。

セカンドスクール・プレセカンドスクール

武蔵野市教育委員会

【東京都】

活動概要

- 対象 市立小学校の4年生・5年生、市立中学校の1年生（授業の一環）
- 参加人数 対象学年の全ての児童生徒
- 活動時期 セカンドスクール：（小5）6泊7日、（中1）4泊5日
プレセカンドスクール：（小4）2泊3日
- 活動場所 新潟県魚沼市、南魚沼市、十日町市、長野県飯山市、安曇野市、白馬村、富山県南砺市利賀村、群馬県みなかみ町、片品村、山梨県富士河口湖町、山中湖村、東京都奥多摩町、檜原村
- 連携協力 戸狩観光協会、南魚沼市観光協会、魚沼市地域づくり振興公社、上越国際グリーンツーリズム協議会、南砺市商工会利賀村事務所、大北農業協同組合（JA大北）、越後田舎体験推進協議会、みなかみ町体験旅行、ピレージ安曇野、おくたま地域振興財団 等

背景・目的

- 自然豊かな農山漁村地域において長期宿泊を伴う体験学習を実施。自然の学び舎を「第2の学校」として、普段の学校生活にはない体験を行う。
- 「課題解決への意欲や態度」「豊かな人間関係」「自主性・協調性」「進んで他者と関わる力」などを培うことをねらいとして、平成7年度に小学校で、平成8年度に中学校で開始した。

主な取組

民宿や農家等に宿泊し、農業体験（稲刈り、収穫体験等）、林業体験、実施地の地域（産業・暮らし・自然・歴史等）に関する学習、ハイキング・トレッキング、現地の方との交流、郷土食作り、環境保全活動、などを体験。

（活動内容例）

【事前学習】実施地の自然や産業・暮らしの様子などから関心のあるテーマと課題を設定し、調べ学習に取り組む。

【体験活動】田植え・稲刈り体験、農業の機械化について・商品化・出荷の工程に関する学習、水や森林に関する学習、等

【事後学習】グループごとに学んだことをまとめ、プレゼンテーションソフトを使って下学年・保護者・地域の方などに対して発表、等



特徴

事前・事後学習を含む、発達段階に応じたプログラムを作成

普段の学校生活を「ファーストスクール」とし、そこでは体験しがたい総合的な体験的な学習を「セカンドスクール」で実施。事前学習・事後学習の内容を含め、各学校が創意工夫をしながら計画を立て、実施している。

また、小学4年生を対象にプレセカンドスクールを実施。セカンドスクールとの関連性を考慮しながら、学習効果及び学習意欲を高める工夫をしている。

成果・展望

共同生活により、普段の学校生活では気付かない同級生の良さなどが見え、他人を大切にすることや協力することの大切さを学び人間関係を深めることができる。東京ではできない農業・林業等の様々な体験活動を通して自ら課題解決に取り組む姿勢を育むことができる。

しまの魅力に出会う 日本の宝「しま」交流支援事業 (五島市コース) 長崎県教育委員会、五島市事業実行委員会【長崎県】

活動概要

- 対象 県内の小学4年生～中学3年生（対象の児童生徒全員に募集チラシを配布）
- 参加人数 約40人
- 活動時期 7月23日～7月26日、3泊4日【令和元年度】
- 活動場所 五島市（玉之浦地区・三井楽地区）、頓泊海水浴場、三井楽町公民館、ツナドリーム五島、漁港（三井楽・岐宿・玉之浦）
- 連携協力 五島市教育委員会、株式会社JSH等

背景目的

- 県内の子供を対象に「しま」の魅力を伝え、また島を訪れてみたいと思う人を増やすことを目的に事業を開始。（平成16年度より実施）
- 現在は、地元産業体験や国境離島についての理解を深めるプログラムなどを通して、島と本土の子供たちの相互交流を深めたり、ふるさとを愛する心やコミュニケーション能力を育成することに重点を置いて実施している。

主な取組

海水浴体験や波止釣り体験などの海浜活動、地元産業見学として養殖マグロの給餌体験、3つの地区に分かれての農山漁村民泊体験、島の名所や島ならではの自然を感じるトレッキング等を実施。

また、国境離島についての理解を深める教育プログラムを実施した。



特徴

島の自然・歴史・暮らしなどについて理解し、ふるさと長崎県の素晴らしさを再認識する

市の実行委員会に県の担当者が出向き、事業内容について協議するなど、協力しながら事業を進め、観光メインだった活動から交流や体験などの教育的要素を盛り込んだプログラムに変更していった。

五島市コースでは、養殖マグロの給餌体験や民泊体験などを実施。島の漁業のことや、領海のことなどについて学んでいる。



成果・展望

3泊4日の活動を通して「しま」についての理解を深め、また訪れてみたいと思う参加者が多く見られている。

参加者の事後アンケートでは、漁業にとってなくてはならない大切な島であることや、人口減少の問題等に対して認識が高まっていることが窺える。

漁業体験学習

洋野町立宿戸中学校

【岩手県】

活動概要

- 対象 町立宿戸中学校の1～3年生（同校全生徒参加）
- 活動時期 1年生7月下旬～8月上旬、2年生12月上旬及び3月上旬、3年生4月中旬
- 活動場所 宿戸漁港地先等（荷さばき施設、増殖溝）、修学旅行先（東京都）
- 連携協力 種市南漁業協同組合、岩手県立種市高等学校

背景目的

- 近くに海がありながら、海との関わりが薄れるとともに漁業の担い手不足が深刻化している地域の現状がある。
- 地域の基幹産業である漁業を体験することにより、海に親しみ、地域を愛する心を育てることを目的として実施している。（平成17年度より実施）

主な取組

特産であるウニを採取し、塩ウニ加工、更には鮭とば作りを行い、商品として修学旅行で販売する体験を通して多様な学びを得る機会とする。また、学習活動を通して自然の大切さや脅威を学ぶとともに、地域の復興・発展に主体的に関わる態度を育てる。

（活動の内容）

- 1年生 ウニ採取、ウニ剥き身作業、塩ウニ瓶詰、瓶ラベル作成
- 2年生 鮭加工、天日干し、商品加工袋詰め
- 3年生 1年生、2年生が作った塩ウニ及び鮭とばの販売
（修学旅行中にいわて銀河プラザにおいて販売）



特徴

採って加工し、販売するまでの一連の営みを学ぶ

一連の営みを学ぶ中で、漁業の大変さや面白さ、そして販売の難しさを実感する。また、加工品の購入者とのやり取りを通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション力の育成を図ることができる。

成果・展望

一連の営みを体験することにより、生徒は働くことの大変さを知るとともに、仕事を終えた後の達成感や漁業の楽しさを実感している。漁業者の方々とともに活動することで、実感の伴った勤労観を得ることができる。本校は、令和2年3月末で閉校となるが、統合先の学校においても「地域とともにある学校づくり」を推進し、継続して実施していくこととしている。

農業体験学習

多賀城市立東豊中学校

【宮城県】

活動概要

- 対象 市立東豊中学校の2年生（学校行事）
- 参加人数 97人【令和元年度】
- 活動時期 5月9日～5月11日、2泊3日【令和元年度】
- 活動場所 岩手県遠野市内
- 連携協力 遠野山・里・暮らしネットワーク

背景・目的

- 民泊による農家での体験活動を通して、人とのふれあいの中から協調性や社会性を身に付けさせる。
- 農業という第一次産業の仕事に関わることで将来の仕事について考えるきっかけとする。

主な取組

宿泊班ごとに、体験先の農家に民泊し、畑作業や酪農等の農業体験をする。

事前学習で遠野市の民話や産業などについて学習し、遠野市の歴史や風土を学んでから開村式に臨む。

民泊先の家族との交流を通して社会性を高めたり、働くことの意義について考えたりできる内容となっている。



特徴

農家での活動を通じて、働くことの意義や将来のことについて考える

学校を離れた校外での活動であり、家族や教員以外の大人との交流からコミュニケーション能力を高めたり、将来について考える場を設定したりできるように工夫している。



成果・展望

農業に対する興味・関心に高まりが見られている。

また、退村式での生徒の発表や事後のまとめなどから、民泊や様々な活動を通して感謝の気持ちを素直に話せるようになるなど、心の面でも成長が見られるようになっている。

「ふれあえVA!福島」民泊体験学習

越谷市立平方中学校

【埼玉県】

活動概要

- 対象 市立平方中学校の2年生（参加確認書により参加を確認）
- 参加人数 107人【令和元年度】
- 活動時期 9月18日～20日【令和元年度】
- 活動場所 福島県南会津町（館岩地区、伊南地区、南郷地区）、各民家
- 連携協力 株式会社旅クラブジャパン、南会津農村生活体験推進協議会、会津高原自然学校

背景目的

- 地域・校外に出て多くのひと・ものから学ぶという学校の教育方針の下、本校独自の取組「かたれVA!」（交流の中の対話、授業の学び合い、対話や発信を促す場面を意図的に設定する取組）、「ふれあえVA!」（総合的な学習の時間の名称で、様々な人たちとの交流を呼ぶ）の一環として実施。（平成29年度より実施）

主な取組

生徒4名程度が各地区の民家に宿泊し、その家庭の日々の農作業等を一緒に行う。

初日は、入村式を行い、民家の方との顔合わせ、各民家に分かれての体験を行った。2日目には各民家での活動を実施。3日目は、最後の体験を行い、その後に離村式を経て帰校した。

活動内容は各民家によって様々で、雨が降った日は、屋内でできる農作業を行ったり地域の生活や文化について学んだりした。晴れた日は、草取りや作物の管理、収穫などに民家の方と取り組んだ。2日目の夜には生徒が民家の方々に感謝を伝える会を企画して交流を深めた。



特徴

生徒の住む環境ではできない様々な体験の中で、たくさんの人に支えられている実感と感謝の気持ちを高める

たくさんの体験活動を行うとともに、福島に残る原発事故等の差別や偏見に直に接した中から、自分なりの考えや思いを持つことによって、たくさんの人に支えられている実感と感謝の気持ちを高めることができる内容に改善し、実施している。

成果・展望

普段できない体験を通して、人々の努力や多くの人に支えられている実感を持つことができた。また、働くことの大変さを実感し、将来について考えるきっかけとなり、今後の進路指導に活かしていくことができる取組となった。

民家の方々の温かさに触れることで、生徒同士でもお互いに尊重し合える優しい気持ちが高まった。

修学旅行での酪農体験

和歌山県立向陽中学校

【和歌山県】

活動概要

- 対象 県立向陽中学校の3年生
- 参加人数 80名【令和元年度】
- 活動時期 5月27日～5月30日（修学旅行）【令和元年度】
- 活動場所 公益財団法人キープ自然学校
- 連携協力 公益財団法人キープ自然学校

背景目的

- 和歌山県立向陽中学校は中高一貫校で高校の環境科学科に接続しており、総合的な学習の時間を「環境学」として実施している。その特色を修学旅行に活かすために、大自然の中で循環型酪農を体験できる山梨県北杜市清里のキープ自然学校で活動を実施。その活動は開校から14年間継続している。

主な取組

- 1日目に事前学習と森の中を散策するナイトウォッチングを実施。
- 2日目は早朝からの酪農体験。牛を放牧し、牛舎の清掃や搾乳、牧草集めなどを体験する。

（活動の内容）

1日目：夕方、何一つ無駄にすることなく活用する循環型酪農について、スライドによる事前学習を受講する。

2日目：5時起床。6時から牛舎を開放し、牛を牧草地まで放牧。その後40分ほどかけて牛舎を清掃し、糞尿は全て溜め置き、長期間ねかせて堆肥をつくることを学ぶ。（堆肥は牧草地に散布する）

朝食後9時、牧草地に行き牛舎まで集牧。最後に搾乳を体験する。

体験終了後、宿舎に戻り、質疑応答とスタッフから体験談を聞く。



特徴

事前・事後学習を充実させ、循環型酪農について深く学ぶ

循環型酪農のもつ意味を事前・事後学習で深めることで、自然環境の大切さ、生命の尊重や自然の中での人間らしい生き方など、頭で理解するのではなく体験しているからこそ実感として学ぶことができている。

成果・展望

日常では体験できないことばかりであり、初めは牛や糞尿に恐怖や嫌悪感を表す生徒もいるが、作業を進めるうちに、抵抗なく没頭するようになる。酪農家の仕事について体験談を聞くことは生徒に感動を与え、「牛の命を頂く」ことから命の大切さを学ぶとともに、自然の中で人間らしく生きるキャリア学習としても有意義な取組となっている。



多文化共生(ダイバーシティ)の意識を高める活動



高萩国際交流の集い

高萩市国際交流協会

【茨城県】

活動概要

- 対象 国際基督教大学、青山学院大学、亜細亜大学の外国人留学生
(各大学にチラシを配布して募集)
- 参加人数 20名【令和元年度】
- 活動時期 毎年1回、5月3日～5月5日(2泊3日)【令和元年度】
- 活動場所 市公民館、総合福祉センター、ホストファミリー宅など
- 連携協力 高萩市教育委員会

背景・目的

- 昭和50年に在京大学の外国人留学生と日本人学生の交流の場として「高萩国際セミナー」を開催。
- その2年後、事業の名称を「高萩国際交流の集い」と変更。このときからホームステイを取り入れ、市民と外国人留学生との交流として今日まで続いている。

主な取組

市民と外国人留学生の交流の場となるように日本の伝統文化の体験や日常生活の体験を行い、国際理解を深めるとともに国際感覚を培う活動としている。

留学生は、餅つき、茶道、お琴、尺八などの体験やホストファミリー宅でのホームステイを通じて市民との交流を深める。また、ホームステイ中に自国の話をしながら食事をするなど、異文化に触れることができる。

(活動の内容)

- 【1日目】日本文化の体験、歓迎パーティー
(昼間) 茶道、琴、尺八、餅つきなどの日本文化の体験
(夜) 食事やゲームなどの歓迎パーティー
- 【2日目】ホームステイ
- 【3日目】ホームステイ、お別れ会



特徴

ホームステイにより市民と外国人留学生が交流、継続的な関係性が築かれている

令和元年度で45回を数える高萩市国際交流協会が主催する事業。在京の外国人留学生をホームステイで受け入れる活動が長年継続しており、事業を契機に祭りや正月などに留学生が再訪し、家族ぐるみの交流が続いていることも多い。

成果・展望

事業が終了した後もSNSなどでつながり、外国人留学生の自国へ向かうホストファミリーがいるなど、市民、外国人留学生どちらにも大きな変化をもたらす事業となっている。

「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室

群馬大学

【群馬県】

活動概要

- 対象 外国につながるの住民一般、地域日本語教室に関心のある方、外国人留学生・日本人学生等
- 参加人数 20人～80人
- 活動時期 6月～3月に月2回（日曜）、年に1・2回程度1泊2日の宿泊活動あり
- 活動場所 群馬大学太田キャンパス、世田谷区民健康村なかのビレッジ（宿泊場所）、等
- 連携協力 群馬県、太田市、川場村

背景目的

- 文化庁「生活者としての外国人」のための地域日本教育事業の委託を受けて誕生した群馬大学「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室。外国につながる子供たちの持っている見方・考え方や発想の豊かさを活かし、その家族とともに、地域住民が生き甲斐を持って社会貢献につながる協働活動を実施。
- 委託事業終了後も、防災・観光・環境・健康づくり等をテーマに活動を継続している。

主な取組

防災・観光・環境・健康などの生活課題をテーマに課題解決を図る取組を実施。具体的には、地域の方とともにワークショップを開いて実態把握をし、そこから課題を抽出し、実態の確認と方策を考えるためのフィールドワークに出て、課題解決を検討する。（フィールドワークは宿泊を伴う活動も実施）

外国につながる青少年も中心となって活躍しており、青少年の視点から、分かりにくい掲示や説明を掘り起こし、どのように伝えたらいいのかなど、積極的な意見交換が進んでいる。

特徴

外国につながる青少年とともに生活課題の解決に地域協働で取り組む

例えば、小学生も大人と一緒に、プログラムを企画・運営する一員として参加。フィールドワークの事前事後の検討会にも、フィールドワークに行くバスの中でも、宿泊先でも、役割が与えられチームの一員として、与えられた役割を遂行する。

与えられた役割を理解し、状況を把握しながら、責任を持った行動を自ら進んでできたという実感が持てるよう、参加者も青少年を見守り、応援する。自分たちが実感する小さな疑問や戸惑いを発端に、地域の方と一緒に考え行動することが社会貢献につながることを実感してもらえるようにと願って、活動している。



成果・展望

企画する青少年たちにとって、自らが企画の段階から関わり、主体的に参加してきた活動の内容と自分たちの考えが、地域に貢献しているという実感は、大きな自信につながっている。

活動の過程で、青少年の発言や質疑応答にも、よく調べて考える、人の話をよく聞き感想を返すなどの姿勢も生まれ、教室活動の質の向上にも貢献している。青少年たちが、教室の担い手となるよう、活動継続しながら見守り、応援していく。

多文化キッズキャンプ

岩手大学グローバル教育センター

【岩手県】

活動概要

- 対象 外国につながる児童生徒、その保護者、外国につながる子どもの支援者、大学生（チラシ、支援者からの周知、岩手県内市町村教育委員会を通じての募集）
- 参加人数 50人【令和元年度】
- 活動時期 1月12日・13日【令和元年度】
- 活動場所 岩手山青少年交流の家
- 連携協力 いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会、いわて*多文化子どもの教室むつまじこくらぶ（盛岡）、日本語サポートクラブNIKK（二戸）、外国人の子ども・サポートの会（仙台）、東北多文化アカデミー（仙台）、みちのく国際日本語教育センター（八戸）（令和元年度の実施・協力体制）

背景・目的

- 外国人散在地域の岩手県では、広域に散在する外国につながる子どもは同じような境遇の存在が身近にいないため孤立しがちで、学校でも支援のノウハウもなく、民間の支援者が孤軍奮闘する状況が続いた。
- 平成19年に教育委員会、大学、国際交流協会、民間支援団体等で「いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会」を設置し、情報交換及び事業を開始した。その活動の一環として、「多文化キッズキャンプ」として、大学生による子どもの日本語・教科学習支援、交流活動を年1回のペースで継続している。平成23年度からは、青森、宮城、福島に参加者も加え実施している（平成29年度からは岩手、青森、宮城の3県で実施）。

主な取組

岩手、青森、宮城の外国人散在地域に在住する、外国につながる子どもの日本語及び教科学習の支援を行う。学習だけでなく、スポーツ、共同活動を取り入れ、交流が深まるようにしている。

（活動の内容）

- 【1日目】オリエンテーション、昼食、交流ゲーム（雪遊び）、勉強タイム、みんなで遊ぼう（プレイタイム）、夕食、おしゃべりタイム
- 【2日目】掃除、朝食、勉強タイム、お別れ会、昼食



特徴

教育委員会、大学、国際交流協会、民間支援団体等の連携により、外国につながる子ども・保護者が交流を深める

年1回、同じ境遇の子どもが交流することで孤立感から解放され、また、大学生（留学生を含む）との交流により進路について考える契機となっている。

日頃孤立しがちな子ども、保護者、支援者が直接接して交流し、情報交換、心理的つながりを深め、ネットワーク構築の場となっている。

成果・展望

子どもたちは、大学生・留学生との交流により、日本語・教科の理解が進み、進学や就職等について情報を得られ、同じ境遇の仲間ができた。大学生にとっては外国につながる子どもが地域に散在していることや支援の必要性を知る機会となった。保護者・支援者間ではネットワークが構築され、情報交換がしやすくなった。

みなとキャンプ村

港区・港区青少年対策地区委員会

【東京都】

活動概要

- 対象 港区在住・在学の青少年（主に小学生・中学生）、及び、青少年対策地区委員会の育成者・リーダー（募集方法：地区委員会（10地区）ごとにチラシ等を配布）
- 参加人数 550人程度
- 活動時期 夏休みの一定期間（2泊3日の2ローテーション）
8月10日～12日及び8月17日～19日【令和元年度】
- 活動場所 平山キャンプ場（山梨県小菅村）
- 連携協力 港区・港区青少年対策地区委員会の共催

背景・目的

- 港区青少年対策地区委員会（10地区）と区の共催で、青少年が自然に親しむ機会と野外活動の体験を通して、自主性・協調性・創造性を養い、団体生活のマナーを学ぶことを目的として事業を実施。（昭和52年度より実施）

主な取組

夏休み中の2泊3日、キャンプ場に行き、地区委員会のリーダーや育成者等の指導の下、プログラムを実施。プログラムは、各地区委員会のリーダーや育成者が企画・実施し、野外炊飯、川遊び、ハイキング、キャンプファイヤー、花火大会など、都会で普段は味わえない体験の機会を提供する。

参加者の募集も地区委員会ごとに行い、各地区小学1年生～中学3年生と幅広い年齢層が参加。また、高校生、大学生、その他地域の青少年がリーダーとして参加し、参加児童の保護者や地区委員会メンバーも育成者として参加している。



特徴

学年や学校の違う子どもや、障がいを持つ子どもが、自然の中で寝食をともにする

学年や学校の違う子どもたちが、自然の中で寝食をともにする経験の中で、正義感や倫理観、他者を思いやる気持ちを育てている。

平成28年度より、障がい児の補助に当たる方への謝礼を区が支給することとし、障がい児を含め、様々な個性を持った方に対する事業参加を促し、多様性の尊重・受容について支援を行っている。

成果・展望

普段の生活では関わることのない、他の学校や、異年齢の子ども同士でのコミュニケーションや、活動の中で自然と助け合うような姿が多く見られる。また、寝食をともにする中では、喧嘩や葛藤が生じることもあるが、リーダーや育成者に見守られ、子ども同士で解決したり、相手を受け入れようとする過程を大切にしている。

みなとキャンプ村反省会（区と地区委員会リーダー等が参加）で、成果等の情報共有を図っている。

グローバルキャンプ

石川県教育委員会

【石川県】

活動概要

- 対象 県内の小学5・6年生（チラシを配布し、電子申請・はがきによる申込み）
- 参加人数 各回45人程度
- 活動時期 夏・秋・冬 各1回（計3回）、各回1泊2日
- 活動場所 県立鹿島少年自然の家、県立能登少年自然の家、県立白山ろく少年自然の家
- 連携協力 NPO法人YOU-I

背景目的

- 県内で生活する様々な国の子供や大人が増えてきており、グローバル化する状況子供の頃から理解し、今後の生活に活かしてもらえるように実施の計画がなされた。
- 県内の小学生と外国人スタッフがともに自然体験をはじめ様々な活動を通じて、多文化共生の理解を深めるとともに、外国語学習の意欲の向上を図ることを目的として実施。（令和元年度より実施）

主な取組

自然体験や様々な活動を通して、外国のスタッフと交流。
また、イスラム系のスタッフに合わせたハラール料理を食べるなど、外国の文化を体験により感じられるようなプログラムを実施している。

（活動の内容）

- ・ 自然体験活動（いかだ体験・魚釣り・雪遊び）
- ・ イングリッシュタイム
- ・ 世界の文化紹介
- ・ 世界の遊び体験



特徴

5か国の異なる国の外国人スタッフと一緒に体験して世界の文化を感じる

異なる国の外国人スタッフが5名参加し、「世界の遊び体験」では、参加者全員が5か国の遊びを体験できるように時間を区切って活動を実施。

各回実施後、外国人スタッフと反省会を設け、遊び内容の変更やプログラム以外の自由時間の関わり方等について改善を図り、次回の実施に活かせるようにしている。（例：各国の簡単な言語を、様々な活動場面で使用する機会を設けた。）

成果・展望

参加者は、世界には自分たちとは異なる文化があることや、外国の人とコミュニケーションを図るためには、言語だけでなく、文化も理解することが大切であることに気付くことができた。また、コミュニケーションを図る機会を通して、必要性を感じながら言語を学ぼうとする姿が見られるようになった。
今後は、プログラムの改善を図り、多文化共生の意識がより高まるようにしていく。

ふっさっ子グローバルヴィレッジ

福生市教育委員会

【東京都】

活動概要

- 対象 市内在住の小学5・6年生、中学校の全学年（公募）
- 参加人数 定員40人
- 活動時期 夏季休業中（2泊3日）
- 活動場所 東京グローバルゲートウェイ、他
- 連携協力 特になし

背景・目的

- 福生市では、「福生市の青少年を海外に派遣し、その国の歴史を学び、文化及び風土に直接接し、人々と交流することによって相互理解を深め、将来、国際的な視野に立って活躍できる人材の育成を図る」ことを目的に、平成2年度から青少年海外派遣事業を実施。
- 平成29年度から、青少年海外派遣事業の代替として、より多くの子供たちに国内において異文化に触れてもらうことをねらいに、ふっさっ子グローバルヴィレッジ事業を開始した。

主な取組

日中はより外国に近く、状況などがイメージしやすい施設（東京グローバルゲートウェイ）にて実際のシチュエーションに沿った英語を学び、夜はレクリエーションを通して英語や異文化を学ぶ活動を実施。

（活動の内容）

- ・日本の伝統遊びを伝えよう
- ・留学生の母国の遊び
- ・プログラミングを体験しよう
- ・ダンスパフォーマンスをしよう



特徴

～より多くのふっさっ子の国際感覚を育む～

自国・他国の文化とともに、理解を深めるきっかけをつくる

より多くの子供たちが安全に他国の人々と交流ができる事業として実施。

活動1日目は、外国人に対して、言語や文化の違いなどにより上手く伝えられないことや相手の言うことに対して理解できず、動揺している様子も見られる。

しかし、最終日には自分の知っている言語やジェスチャー等を使いながら伝えるなどの工夫をし、会話の中で笑顔やハイタッチする姿等が見受けられた。

成果・展望

外国人に日本の文化を伝えるプログラムや他国の文化を体験することで、自国の文化をよく知り、他国の文化を知ることができるきっかけとなっている。

シンガポール訪問団と宇城市中学生との 交流事業

宇城市教育委員会・熊本県立豊野少年自然の家 【熊本県】

活動概要

- 対象 宇城市の中学生（応募者を各学校で取りまとめの上、豊野少年自然の家に提出）
- 参加人数 31人（宇城市の中学生）【平成30年度】
- 活動時期 11月17日・18日、1泊2日【平成30年度】
- 活動場所 熊本県立豊野少年自然の家及び阿蘇市
- 連携協力 宇城市教育委員会と熊本県立豊野少年自然の家の共催

背景目的

- 次代を担う中学生に異文化との交流や体験を通じて国際感覚を身に付けさせることを目的に、宇城市とシンガポール間で実施している国際交流事業に関し、豊野少年自然の家を活用し生活をともにする中での相互理解及び体験活動を通して、更なる親睦を深めるために実施。（平成27年度より実施）

主な取組

シンガポールの中学生（10人）、引率者（4人）と宇城市の中学生が豊野少年自然の家で様々なプログラムを体験しながら、交流を図った。実施内容については、事前にシンガポール側の要望を受け、宇城市と打合せを重ねて決定した。

日本の文化に触れる観点から、伝統的な遊びを取り入れた「昔遊びリンピック」や「巻き寿司体験」、「書道体験」を実施。

2日目には校外学習として阿蘇山の火口を見学し、その他、ジェスチャーゲームなどを通して交流を図った。



特徴

日本の文化を通じて交流、その素晴らしさを再認識する

「巻き寿司体験」では、なかなか目にすることのない巻き寿司に、シンガポールの生徒たちはとても感動していた。

また、宇城市の中学生も、自分で巻き寿司を作ったことのない人が多く、日本の文化の素晴らしさを再認識する機会となった。

書道体験では宇城市の中学生が先生となり、基本やお手本を指導し、交流を行った。



成果・展望

事業当初は、スタッフを介してのコミュニケーションが多かった参加者であったが、様々な体験をともにすることで、互いに積極的なコミュニケーションを図るようになるなど、変化が見られた。

このように、本事業は体験活動を通して、外国人とコミュニケーションを取る力の醸成や、他国文化の理解促進を促し、グローバルな人材育成にもつながるものである。

国際交流サマーキャンプ

新潟県教育委員会・新潟県少年自然の家

【新潟県】

活動概要

- 対象 県内の大学に在学している留学生、国際交流に興味がある中学生、高校生
(県内の市町村教育委員会、中学校、高等学校にメールにて案内)
- 参加人数 47人【令和元年度】
- 活動時期 8月19日・20日、1泊2日【令和元年度】
- 活動場所 新潟県少年自然の家、村上市内の施設、店舗
- 連携協力 新潟県、新潟県国際交流協会

背景目的

- 日本で勉学に励んでいる留学生と県内の中高校生が交流し合うことを目的とし、国際社会に向けた中高校生の視野を広げるとともに、相互の異文化理解と交流を図る。
- 令和元年度のリニューアルオープンに合わせ、新規事業として実施。

主な取組

県内の大学で勉学に励んでいる9名の留学生と、国内中高校生の参加者が、村上市内歴史巡検、交流会、レクリエーションを実施。留学生が自分の国の文化や食べ物を紹介したり、民族衣装を着たりと様々なレクリエーションを通して交流を深めた。

留学生の参加及び留学生による自国紹介のプレゼンテーションについては、県国際課、及び、国際交流協会と連携・協力して実施。

(活動の内容)

〔一日目〕

村上市内歴史巡検ツアー(おしゃぎり会館、村上市スケートパーク、店舗)
交流会

〔二日目〕

カヌー体験(荒天のためインドアスレチックに変更)



特徴

活動を通じて交流を深めるとともに、互いの文化について理解を深める

令和元年度の新規事業で、30人募集のところ、県内広範囲の中高生から47名の応募があった。留学生は韓国・ベトナムの方が参加。自分たちで回る場所を決めて村上市の街歩きを行い、地元の方の話を聞きながら村上の歴史と文化を学んだ。

成果・展望

村上市内歴史巡検ツアーや交流会で交流を深めるとともに、互いの文化について理解を深めた。

参加者からは、「言語や伝統文化、民族衣装などの紹介を聞くたびに興味関心が一層増した」、「お互いの文化を紹介し合い、新たな発見が多くあった」などの感想があった。

「世界との対話と協働:アジア・オセアニア 高校生フォーラム」 和歌山県・和歌山県教育委員会等【和歌山県】

活動概要

- 対象 高校2年生以上の生徒及び高等専門学校に在籍する高校2年生から高校3年生に相当する学生（公募）
- 参加人数 県内20人、県外5人、海外20人【令和元年度】
- 活動時期 7月、年に1回、4泊5日
- 活動場所 和歌山県民文化会館等
- 連携協力 和歌山県、和歌山県教育委員会、アジア・オセアニア高校生フォーラム実行委員会、ERIA（東アジア・アセアン経済研究センター）の共催

背景・目的

- 和歌山県の高校生が、アジア・オセアニアの国・地域の高校生とともに、世界共通の諸課題や観光・文化等について意見交換し、グローバルな視野を持って物事を捉える力を養う。また、自らの考えを相手に伝える機会を通して、国際社会で活躍できるリーダーの育成を図る。
- 本県の高校生が、和歌山の文化遺産等に触れ、他国等の高校生と相互理解を深めるとともに、郷土への愛着と誇りを育む機会とする。

主な取組

県内外の高校生とアジア・オセアニア地域にある20の国や地域から参加した高校生が、世界共通の課題について意見交換やプレゼンテーションを行ったり、それぞれの文化を紹介したりする活動を行う。

フォーラムの分科会では、研究カテゴリーから独自のテーマを設定し、そのテーマについて、将来、アジア・オセアニアの人々がより友好的な関係を築いていけるよう調査、研究、考察、提案を行う。

（活動の内容）

- ホームステイ
- 和歌山県世界遺産研修ツアー（高野山視察）
- フォーラム分科会・全体会（研究成果の発表・討論）
- 知事主催レセプション（文化交流等）



特徴

参加生徒同士の交流の時間を多く設け、相互理解を深める

互いの国・地域を紹介する時間を設ける他、参加者は全員、主催者が指定したホテルに宿泊し、日本の生徒と海外からの生徒を相部屋にするなど、相互の交流と理解を深めるようにしている。

成果・展望

合宿後半には、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度が見られるようになる。

「自国の文化とともに他国の文化にも興味を持ち続けたい」や、「高みを目指して様々なことに挑戦したい」などの感想を持つ生徒が見られる。

地域における青少年の国際交流推進事業 (サマースクール) 宮城県教育庁

【宮城県】

活動概要

- 対象 県内外の高校1年生～3年生（チラシ、ホームページ、SNS、説明会等で募集）
- 参加人数 宮城県内外の高校生約60人、サポートに国内外の大学生、その他協力団体
- 活動時期 夏休みの時期に、6泊7日で実施
- 活動場所 女川町の公共施設、協力施設及び県立自然の家（松島自然の家）
- 連携協力 共催：女川町、女川町教育委員会
協力：特定非営利活動法人アスヘノキボウ、認定特定非営利活動法人カタリバ、一般社団法人HLAB

背景目的

- 宮城県内外の高校生等に、「国境も言語も世代も超えた多様な出会い」を通じて、社会性や勤労観を養い、自己を見つめ直し、将来を真剣に考える機会を提供するとともにその成果を普及することで、「みやぎの志教育」を推進することを目指して実施。同時に、外国語に親しみ、外国語への意欲と語学力の向上を図るものとして実施している。（平成29年度より実施）

主な取組

文化の違う複数の国の大学生と一定期間、宿泊を伴う共同生活をし、海外大学生との交流や、有識者のセミナー受講等を行う。また、下記の内容を含むものとして実施。

【宮城県として】

- 宮城の現状の理解（震災と復興の状況）
- 防災・減災の理解、自然体験活動

【地域として】

- 復興を担う人々との交流
- 地元の環境・素材を活用したワークショップ（復興の現状と人々の思いの理解）
- 地元中高生との交流



特徴

海外の大学生と復興についてディスカッションすること等を通して、将来の宮城の在り方について考える契機とする

これからの復興を担う県内外の高校生・大学生が、海外の大学生に、現在の復旧・復興の様子を伝えるとともに、今後の復興についてディスカッションすることを通して、将来の宮城の在り方について考える契機としている。また、本事業を通じて国内外に宮城の復興の様子をアピールするものと位置付け、実施している。

成果・展望

アンケートでは、参加者の語学力、コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、外向き思考に対する意識に著しい変化が見られた。様々な分野で活躍される社会人からの講演や、海外大学生とのディスカッションの中から、自分の夢等に向かって挑戦しようとする意識が向上している。また、常に外に目を向け、積極的に関わろうとするとともに、自分の考えを表現する力が向上している。



地域間交流・地域間協働を推進する体験活動



南の国の真夏に挑む体験の旅

南富良野町

【北海道】

活動概要

- 対象 町内の小学6年生（全員参加）
- 参加人数 14人【令和元年度】
- 活動時期 6月最終週（月～金、4泊5日）、うち1泊はホームステイ
- 活動場所 沖縄県本部町、那覇市、糸満市
- 連携協力 沖縄県本部町

背景・目的

- 令和2年度に30回目を迎える交流事業は、国体のカヌー競技開催地となったことを縁に、平成2年度から夏に本町より本部町へ、冬に本部町から本町に児童を派遣し合いながら交流を深め、平成8年7月には「友好の町」として盟約調印を交わしている。
- この事業は、南富良野町の次代を担う児童が、4泊5日における貴重な体験を通して異文化への理解、規律ある集団生活の中から社会性を育むとともに、自主性や思いやり、使命感・責任感を養うこと、悲惨な戦争の傷跡から平和の尊さを学ぶことを目的とする。

主な取組

真夏の本部町を訪問し、本部町の人々との交流を通して、南北の自然環境や生活文化の違いを直に体験するとともに、悲惨な戦争の傷跡から平和の尊さを学んでいる。
また、南富良野町の親善大使として、本部町の人々に南富良野町を紹介することを通して、郷土愛の精神を培っている。

（活動内容）

本部町内学校における交流学習
文化体験 ホームステイ 平和学習



特徴

事前学習で歴史や自然環境等を学び、自分の目で確かめ、体験・学び、振り返る
事前学習において、沖縄県及び本部町の歴史、自然環境や生活様式の違いを学び、事業を通して学びたいことについて目的意識を持ち、自分の目で確かめ、体験・学び、振り返るサイクルを確立している。
学校教育と連携している事業であり、各学校の担任及び随行者と事業目的の共有と実施方法の協議を行い、事業終了後には、事業評価会議を行い成果と課題を明確にしている。

成果・展望

戦争の傷跡を目の当たりにすることで、平和への尊さを学ぶことができる。
5日間の中で、家庭では学ぶことのできない集団生活を通して、自主性や思いやり、使命感・責任感を養う貴重な体験をすることができる。
児童は、抱負及び感想文を作成し、事業で学んだことを振り返る機会を持つようになっている。
児童にとって人生の中の大切な体験となるよう、今後も継続して事業に取り組み、両町の友好の輪を広げていきたい。

多良間村就業意識向上支援事業

多良間村教育委員会

【沖縄県】

活動概要

- 対象 村内の小学6年生、中学1年生、中学2年生（実施要項に基づき募集）
- 参加人数 小学6年生：9人、中学1年生：7人、中学2年生：14人【令和元年度】
- 活動時期 小学6年生：6月18日・19日、中学1年生：11月22日・23日、
中学2年生：7月30日～8月2日【令和元年度】
- 活動場所 小学6年生：沖縄本島、中学1年生：宮古島市、中学2年生：沖縄本島
- 連携協力 沖縄県、NPO、民間企業

背景・目的

- 村では人口減少が続いており、また、島内には高等学校がなく、中学校卒業と同時に、親元を離れて、宮古島市や沖縄本島等で高校生活を送ることになる。
- 多良間村における現状と課題を踏まえ、児童生徒に将来像を明確に設計してもらうとともに、キャリア教育と就業意識向上のための支援を行い、地域に還元できる人材の育成を図ることを目的として事業を実施している。

主な取組

島外で様々な企業、職種があることを理解し、職業観及び勤労観の喜びを深めるため、幅広く実施。各プログラムを通して、社会人としての規律・礼儀・言葉遣いの大切さを知る機会とし、児童生徒に将来の生き方について考えさせ、進路選択に活かせる機会としている。

（活動内容）

- 小学6年生：島外で行うジョブシャドウイング（働く人（メンター）の様子を児童がメモを取りながら観察する、観察型キャリア教育）
- 中学1年生：多良間村及び宮古島市で行うプロジェクトT（中学生多良間村課題解決プログラム）
- 中学2年生：島外で行う職場体験（体験型キャリア教育）



特徴

人材の還流、未来の多良間村に貢献できる人材を育成する

多良間村型のキャリア教育を通じて、島外での学びを支援し、将来的に地域の特性を理解し、多良間村に貢献できる人材を育成する。将来的に支えられる側から支える側になる、「人材の還流」を目指している。

そのため、地域が連携して、島外での職場体験等のキャリア教育を推進している。

成果・展望

職業観の意識向上、勤労の喜びの実感等が情操教育につながり、将来を担う児童生徒の育成を図っている。

また、この事業を継続することで、地域に還元できる人材の育成を図っている。

洋野町青少年交流事業

洋野町教育委員会・洋野町青少年交流事業実行委員会

【岩手県】

活動概要

- 対象 町内の小中学生（児童生徒数に応じて案分し、学校へ推薦依頼）
- 参加人数 小学生10人、中学生7人【令和元年度】
- 活動時期 隔年で沖縄県金武町、北海道浦幌町と相互に訪問・受入交流を実施
沖縄県：7月下旬訪問交流（4泊5日）、1月上旬受入交流（3泊4日）
北海道：8月上旬受入交流（2泊3日）、1月上旬訪問交流（3泊4日）
- 活動場所 相互の自然や歴史、文化を体験できる公共施設等を活用
- 連携協力 小中学校長会、教育振興会、PTA連合会、社会教育委員等

背景・目的

- 洋野町出身者と戦友だった沖縄県在住者からの寄付金を活用し、平成2年度から沖縄県との交流事業を続けており、平成27年度からは、「友好の町絆協定」を結んだ北海道浦幌町との交流が始まった。
- 児童・生徒が県外の子供たちと交流し異なる歴史や文化を学ぶことを通じて郷土への理解を深め、団体活動を通じて責任感と協調性を養い、次代を担う青少年の健全育成と人材育成を目的として実施している。

主な取組

受入時には、洋野町の特色である海洋スポーツ、南部もぐり、パークゴルフ等の体験・見学を通じた交流を実施。

訪問時には、事前研修を通じた訪問先の歴史や文化の学習をし、訪問先の自然、歴史や文化体験を通じた交流を実施している。

（金武町からの受入時の活動例）

【1日目】金武町交流団を洋野町交流団が出迎え

【2日目】奥中山高原スキー場でスキー・スノーボード体験

町民文化会館で洋野町から「ナニヤドヤラ」（伝統的な盆踊り）を、金武町から「エイサー」（伝統芸能の踊り）を披露

【3日目】大野木工を体験、「南部もぐり」（潜水の手法）について学習



特徴

異なる2つの地域との交流を通じて、自然や歴史、文化等を学ぶ

異なる歴史や文化を学ぶことを通じて郷土への理解を深めている。
また、これまで2町との交流事業は年度をまたいで訪問・受入を実施していたが、今年度からは隔年で1町と同一年度内に訪問・受入を実施することとなり、今後より交流が深まると考えられる。

成果・展望

町内の代表として参加し、沖縄県金武町・北海道浦幌町の児童生徒と交流することで、これまで以上にリーダーとして学校での活動に積極的に参加し、他者と関わることができるようになっている。

富士市青少年体験交流事業 キズナ無限∞の島

富士市教育委員会

【静岡県】

活動概要

- 対象 富士市内に在住、又は通学通勤している中学生、高校生、39歳までの方
(チラシ・ポスターの掲示・配架、広報ふじへの掲載、市内中学校、高等学校等へのチラシ配布、富士市内全中学校への出張説明会の開催、SNSを使用しての広報、等で募集)
- 参加人数 中学生88人、高校生12人、39歳までの方12人【令和元年度】
- 活動時期 計7日間 事前研修：7月15日、本研修8月10日～14日、4泊5日、事後研修：9月14日【令和元年度】
- 活動場所 事前研修：富士市教育プラザ、本研修：宮城県気仙沼市大島、民宿・旅館ほか
事後研修：富士市消防庁舎
- 連携協力 一般社団法人気仙沼観光コンベンション協会
実行委員会を設置し、富士市内の有志の方々17名が実行委員として参加

背景目的

- 平成24年まで29年間にわたり実施されていた「富士市青少年の船」の洋上研修（沖縄での平和学習）の後継事業として、平成26年より開始。
- 豊かな自然を有した宮城県気仙沼市の気仙沼大島を舞台とし、4泊5日の宿泊体験研修を通して、一生懸命生きることの大切さ、キズナの大切さをともに学ぶことを目的とする。

主な取組

1班9～10人の12班編成で活動。実行委員が計8回の実行委員会の中でプログラム内容を協議し、当事業がイベント的な効果にとどまることなく、研修生のその後につながる学びを得られるよう、打合せを行う。「本研修」では、自然活動、漁業体験を行うほか、民宿の方々、現地の中学生、商店会の方々等に話を伺い、濃い交流となるようにしている。

(活動内容)

- ・仲間作りプログラム（事前活動、自由交流時間、他）
- ・離島体験プログラム（ビーチプログラム、浦の浜のお祭りに参加、他）
- ・大島の人たちとの交流プログラム（民宿の方と話そう、民宿の方から学ぼう（漁業体験含む）、ダンスプログラム、大島と私 夢の架け橋プロジェクト、他）
- ・被災地学習プログラム（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学、他）



特徴

被災した大島に暮らす人々の力強い生き方に触れることなどの体験は、青少年に力強いエネルギーを与えている

研修地の大島は、平成23年3月の東日本大震災で甚大な被害を受けたが、現在コミュニティの力を活かし、人々が助け合って復興を遂げようとしている。富士市内の年齢や学校の異なる青少年が会し、班別活動を通じ共同生活を行うこと、そして大島に暮らす人たちの力強い生き方に触れることなど、非日常の中での数々の体験は、将来の富士市を生きる青少年に力強いエネルギーを与えている。

成果・展望

最終日には、研修生一人一人が「未来宣言」を実施し、富士市に戻った後、自らが踏み出す一歩（具体的な行動目標）を発表する。

アンケートでは、「積極的に行動するようになった」、「前より人の前で話せるようになった」、「命の大切さを改めて感じ、人を大切にしようと思った」などの感想が見られ、保護者からも「学校でいつもふさぎこみがちな子が、生き生きとした顔で帰ってきた」、「身をもって人と人とのつながりを体験できた」などの感想が見られた。



主権者意識を高める活動



にこにこシティいわくら

岩倉市児童館

【愛知県】

活動概要

- 対象 実行委員：市内の小学3年生～大学生、にこにこシティ参加者：市内の小学生～高校3年生
(実行委員会でにこにこシティ参加者募集のチラシを作成し、各小学校を通じて配布、市のホームページに掲載)
- 参加人数 実行委員：66人、にこにこシティいわくら：282人、ボランティア：大人10人、中学生：6人、大学生：4人【令和元年度】
- 活動時期 実行委員会：6月～11月の間に5回、にこにこシティいわくら：年1回
- 活動場所 岩倉市第一児童館（活動10周年記念は岩倉市総合体育文化センターで実施）
- 連携協力 岩倉ボランティアサークル、岩倉市児童館母親クラブ

背景目的

- 岩倉市子ども行動計画に基づき、子どもが主体的に活動する事業と位置付け、子どもたちが参加し意見表明できる場とする。(平成21年に「ミニいわくらんど」いう名称で開始、翌年名称を「にこにこシティいわくら」と変更し現在に至る)
- 子どもたちの自主性を引き出し、創造性や感性を豊かにし、相手との関係作りや協調性、共感する心を養う。
- 子どものまちなかで生活し、擬似店舗で働くことによって働くことの大切さを学び、生きていく力や社会的なルール、道徳心などの社会への適応力を身に付ける。
- 人とのつながりを築き、人の役に立つことによって自己肯定感や自己存在感を高める。

主な取組

社会の擬似体験の場として、子どもたちが「にこにこシティいわくら」の市民となり、子どもたちだけのまちをつくり、生活をする。子どもたちが生活をしていくために、ハローワークで仕事を探し、擬似店舗で働き、労働時間に応じて銀行で給料（擬似通貨）をもらう。子どもたちが自分で働いて得た擬似通貨は、各擬似店舗で使うことができる。地域の団体や大人（大人スタッフ）への呼びかけを行い、協力を得て行う。



特徴

様々な世代の子どもが関わる活動で、誰もが平等に活躍できる

一般公募で実行委員（子どもスタッフ）を募集し、子ども主体の実行委員会を開催し、子どもの実行委員が中心となって企画し、当日の運営方法や準備を進める。実行委員会では活発に意見が出て、いわゆる「優等生」だけでなく誰もが平等に活躍できる場所になっている。また、実行委員を経験した子どもが中学生や高校生になり、ボランティアで関わるようになってきている。

成果・展望

職員側も手探りで始めた活動であったが、回を進めていくたびに実行委員の数が増え、成果が見られる。誰もが平等に活躍できる場所となり、実行委員会を経験した子どもによるボランティアの参加も見られている。

あしやキッズスクエア(放課後子供教室事業) 体験プログラム 芦屋市教育委員会

【兵庫県】

活動概要

- 対象 市内在住の小学生（私立公立問わず）の中の希望者、一部学童保育児童（ホームページ、又は参加希望者にチラシ配布後、申込用紙提出）
- 参加人数 「クジラ教室」3～10人程度、「熱中症予防対策隊」15～80人
- 活動時期 「クジラ教室」平成30年度2月に2回、「熱中症予防対策隊」令和元年度6月～7月に4回
- 活動場所 小学校内教室・校庭
- 連携協力 甲南高等学校ボランティア委員会、大塚製薬（熱中症予防対策隊）

背景・目的

- 平成28年度より市から甲南高等学校の生徒に自主企画の提案を依頼していた。平成30年度12月に高校生から、捕鯨のことに児童にも興味を持ってもらいたいという提案があり、放課後子供教室事業で、「クジラ教室」を開催することになった。
- また、熱中症が大きな問題となっている中、令和元年度に大塚製薬が甲南高等学校と協働して啓発活動を行う方法を模索していたところ、放課後子供教室事業で「甲南高校生と一緒に学ぼう 熱中症予防対策隊」として、実施することになった。

主な取組

「クジラ教室」では、高校生の提案で児童の鯨の給食の日に実施し、捕鯨の由来など、古来よりクジラとともに過ごしてきたことを学んだ。また、小学生がクジラの絵を描いて高校生と児童とで話をしたり、クジラの大きさを測る体験をしたりした。

「熱中症予防対策隊」では、児童と高校生と一緒に校庭で思い切り遊んだ後、大塚製薬提供の飲料を飲み、熱中症の怖さや処置法などをポスターや寸劇により児童に伝えた。



特徴

高校生が主体的に社会課題に取り組む姿勢を大切にし、放課後子供教室事業として活動を実施

市として、高校生の自主性を最優先し、高校生が児童に伝えたい気持ちや、主体的に社会課題に取り組むことを大切にしたい。活動では、高校生が、自分が普段関わっている児童をイメージし、説明・発表の仕方等について、創意工夫が見られていた。

成果・展望

小学生にとって、日頃一緒に遊んでもらっている高校生が課題意識を持った「捕鯨・クジラ」や「熱中症予防」について教えてもらうことで、知識や興味が深まった。また、高校生にとって、自分で伝えたい素材・内容の選択、伝え方の工夫をすることでプレゼンや伝える能力が高まり、たくさんの児童に教え、考えや質問を引き出すことなどを通し、自己肯定感が高まった。

高校生が近隣の高齢者支援センターにおいて熱中症予防プログラムを行う計画もあがり、大塚製薬社内でも高く評価され、芦屋市と大塚製薬の協定締結の実績となるなど、児童・高校生の主体的な体験活動が学校・企業・事業者・自治体の注目を受け、相互のつながりに寄与し、今後更なる展開も期待することができる。

平川市子ども議会

平川市教育委員会

【青森県】

活動概要

- 対象 市内小学校の高学年（市内各小学校より代表児童2人を推薦）
- 参加人数 2人×9校＝18人、議会傍聴者約50人
- 活動時期 7月に事前研修会を2回実施、子ども議会を長期休業7月中に実施
- 活動場所 平川市議場
- 連携協力 平川市、平川市議会事務局

背景・目的

- 将来の平川市を担う人材育成のために実施され、令和元年度で5回目の実施となる。
- 平成27年6月公職選挙法の一部が改正され、18歳以上の国民に選挙権が与えられるようになることを踏まえ、市内小学生の代表が議会を疑似体験することを通して市の将来の「きらめくまちづくり」に関心を深めてもらうことを目的に開催。
- 本事業を通して培われる議会制民主主義への理解や各学校のリーダーとしての資質の向上は、将来的に学校生活のみならず、平川市の笑顔あふれるまちづくりにつながるものと期待できる。

主な取組

これからの平川市を支えていく児童が、民主的かつ自発的な行動等によって、議会制民主主義の根本である議会制度を体験する。本会議で使用する議場を使用し、議会の所作に則って行う。

（活動の内容）

- ・事前研修1回目：①認定証交付、②市長挨拶、③自己紹介、④議会制民主主義について説明、⑤前年度子ども議会VTR視聴、⑥まちづくりに関する班活動・調べ学習、⑦質問書の作成、⑧決議案の決定、⑨各班のまとめ
- ・事前研修2回目：①決議案確認、②議場での所作について、③議場での練習
- ・子ども議会：①自己紹介、②市長挨拶、③一般質問、④市長答弁、⑤決議、⑥講評、⑦写真撮影等

特徴

各学校の代表児童が、市が抱える問題や改善方策等について考え、提案する！

各校を代表する児童が、1つの目標に向かって協力し合う姿が見られる。

また、中学生については、「平川市生徒会サミット」を開催し、平川市の中学生が抱える問題について話し合い、改善策を共有しながら自校で実践している。子ども議会参加者の多くが、生徒会サミットを中心となって活躍している。



成果・展望

市長が子ども議員の意見を取り上げ、市政に反映させていることが、子どもたちの活動意欲の向上につながっている。

（実現例：市缶バッチによるPR、市トップアスリート教室の継続など）

子ども議会～みんなが住み続けたい千葉市にするために～

千葉市教育委員会 【千葉県】

活動概要

- 対象 市内小学校の高学年（子ども議会議員）、市内中学生（ファシリテーター）
（小中学校へ募集案内文書送付、市政だよりに掲載）
- 参加人数 小学生40人程度
- 活動時期 子ども議会当日（7月下旬）、準備のための学習会（5月・6月・7月に計5回）
- 活動場所 千葉市議会本会議場
- 連携協力 特になし

背景目的

- 市の将来を担う子どもたちが、市の現状と課題について話し合い、「市民一人一人がいきいきと幸せに暮らせるまちづくり」に向けた具体的な提案や質問を行う中で、千葉市民としての意識を高めることをねらいとして、平成22年度より実施。

主な取組

子ども議会当日に向け、学習会を5回行う。
1回目は、市の現状について市長から市の現状と課題について講義を受け、グループに分かれ、その年々のテーマ、課題によって提案の方向性を決定する。その後、調べ活動や市政を担当する職員に提案、質問をしながら、本番の議会提案に向けて準備を進める。
議会当日は、グループごとに工夫した提案方法で、千葉市議会本会議場で提案を行う。それに対して、市長、副市長、教育長が答弁をする。

特徴

子ども主体で子どもが自ら作り上げる議会を目指す

募集の際に、市の課題や取り組みたい内容について記載してもらうことにより、子どもたちの考えを事前に捉えておけるようにする。

子ども主体で子どもが自ら作り上げる議会を目指しており、中学生がファシリテーターとして、学習会や子ども議会当日の進行を務めている。

子ども議会の活動を広く市民周知するため、事業後に教育だよりやリーフレットなどを発行している。



成果・展望

市の課題を見つけ、学習したり、「子ども議会」で提案したことが実際に市政に反映され、実現されたりすることで、子どもたちが市民としての自覚やまちづくりに参画していく意識が芽生えている。

（実現内容例：千葉市の農作物を使った郷土料理の「いももち」の作り方の動画作成、市のホームページへの掲載、DVD作成。千葉市のキャラクターを使ったお弁当の作成、市内デパート等での販売、等）

酒々井学プログラム「酒々井のまちづくり」

酒々井町教育委員会

【千葉県】

活動概要

- 対象 町内全小学校の6年生全児童・中学校の3学年生徒会（授業等を通じて実施）
- 参加人数 170人【令和元年度】
- 活動時期 酒々井のまちづくり：7月（1回）、こども模擬選挙：9月（1回）、こども模擬議会：10月（1回）、ふるさとまつり：11月（1回）
- 活動場所 町内各小学校、町役場議場（こども模擬議会）、中央公民館（作品展示）
- 連携協力 酒々井町企画財政課、選挙管理委員会、議会事務局、中央公民館、町内各小中学校

背景・目的

- 小学校学習指導要領第6学年社会科の記載内容を受けて、酒々井学プログラム「酒々井のまちづくり」では、主権者教育と関連付けて、児童が暮らす町の生活環境の現状に対して関心をもち、町民としての視点と参画意識に基づいた主体的な学習活動を展開できるようにした。
- 平成29年度から、酒々井町の児童生徒のふるさと意識を育むために、ふるさと学習「酒々井学」を始め、その中で小学校6学年を対象に本プログラムを実践した。

主な取組

社会科での主権者教育に関する授業から、模擬議会の開催まで、一連の活動を実施し、全小学校6学年児童の公民的資質を高めている。

（活動の内容）

- 1 ねらい：6学年社会科「わたしたちの生活と政治」で、主権者教育に関する授業を実施
- 2 町役場の働き：町の職員が図書館建設の経緯や行政の仕組みについて解説
- 3 町への願い：自分で調べた町の生活環境の課題・改善プランをまとめ、発表する
- 4 子ども模擬選挙：学級毎に全員が発表した「町への願い」を基に、模擬議会の代表者1名を投票で決める
- 5 子ども模擬議会：小・中学校の代表が一般質問を行う



特徴

児童全員が自分のまちづくりプランを提案、行政に反映させる

ふるさと学習「酒々井学」のプログラムで町内全小学校6学年児童を対象に政治教育との関連から、町行政の仕組みについて学習した後に、町の生活環境について調査し、現状認識をする。全員が自分のまちづくりプランを提案した後に、実際の記載台と投票箱を用いた模擬選挙を通して、模擬議会の代表者を選出する。

また、町の「ふるさとまつり」を活用して、公民館に児童作成シート「酒々井町への願い」を掲示することを通して、町民に対して、児童の住民目線によるまちづくりプランの広報の場としている。

成果・展望

全児童が、今まで見過ごしていた生活環境を住民目線で見直し、行政に反映させるという主権者教育の一端を展開。

駅舎のエレベーター設置、通学路のカラー分離舗装、学校への太陽光発電設備設置、図書館の予約システム導入など、提言が実現している例が多く見られる。

甲賀市子ども議会

かふか21子ども未来会議実行委員会

【滋賀県】

活動概要

- 対象 市内の小学5年生～中学3年生（チラシ配布、市内音声放送・CATVにて周知）
- 参加人数 21人【令和元年度】
- 活動時期 5月（事前説明会）～翌年2月（ふりかえり会）
- 活動場所 甲賀市まちづくり活動センター、甲賀市甲南青少年研修センター、甲賀市役所（議場含む）
- 連携協力 甲賀市、甲賀市教育委員会、甲賀市議会、甲賀市青少年育成市民会議

背景目的

- これからの21世紀を担う子どもたちが、市民と触れ合い、甲賀市の伝統・自然・歴史・文化・産業などについて学びながら体験する中で、自ら考える力や行動する力を引き出す機会とし、社会教育の立場で支援することを目的として開催。
- 社会参画への経験の“場”として、また、甲賀市に提案・提言などを行い、子どもたちからの意見を市行政に受け止めてもらう“場”として「子ども議会」を開催する。（平成23年度より実施）

主な取組

5月の説明会、6月の任命式の後、数回のワークや地域視察等を行い、自分たちの住んでいる地域や甲賀市をより良くするために、活動を通じて感じた思いを提案する。

なお、これまで参加された子ども議員OB・OGに、現子ども議員の議員活動の支援を行ってもらっている。

（活動内容）

- 【5月】事前説明会 【6月】任命式
- 【7月・9月】（宿泊）市内施設等視察
- 【6月・7月・9月・10月・11月】ワーク（議会制度学習、質問・提案まとめ）
- 【1月】議会直前練習、子ども議会（本番）
- 【2月】ふりかえり会



特徴

子ども自身が主体的に考え、多くの苦労もする中で、大きな財産となる経験をする

限られた期間で、子ども自身が主体的に考え、議論して意見を作り上げることなど、多くの苦労も経験する中で、子どもたちの大きな財産となる活動となっている。

自分にとっては良いと思うことでも、他の人からすればそうではなかったりするなど、人それぞれの意見や見方があることを学ぶなど、考えも広がっていると考えられる。

子どもたちが経験を活かして、今後「みんながつくる住みよさと活気あふれる甲賀市」のため、地域活動への参画や青少年活動に活かしていくことが期待される。

成果・展望

他校や異学年の参加者との出会い・交流により自主性や協調性を育むとともに、子ども議会で自ら提案・提言する行為を通じて、自信がついた様子が見られる。これまでに、「図書館の利用を促進するための市内5館の図書館への漫画の配架」や、「公民館付近の歩行者用信号の『青』の点灯時間を長くする」などが、子ども議会における提案により実現に至っている。

川崎市子ども会議

川崎市・川崎市子ども会議推進委員会

【神奈川県】

活動概要

- 対象 市内在住の小学4年生～高校3年生（ホームページ、チラシ、教育だよりで募集）
- 参加人数 不特定
- 活動時期 月2回（年間24回）の定例会議の他、12月「子ども権利の日のつどい」、1月「かわさき子ども集会」、3月「市長報告会」を実施
- 活動場所 川崎市子ども夢パーク
- 連携協力 学識経験者、各行政区地域教育会議、川崎市PTA連絡協議会、川崎市青少年育成連盟、学校関係者

背景目的

- 平成13年4月1日から「川崎市子どもの権利に関する条例」が施行され、市政について、子どもの意見を求めるため川崎市子ども会議が発足した。
- 主な活動は、平成15年7月に川崎市が「川崎市子どもの権利に関する条例」に基づき作った、川崎市子ども夢パークで実施している。

主な取組

月2回の定例会を開催し、平成30年度は「川崎市の良いところ探し」、「子ども会議同士の交流」、「エコキャップ運動」についての調査研究、活動を行い、3月に市長への1年間の活動報告を行った。

また、平成30年度の「子ども権利の日のつどい」、「かわさき子ども集会」では、川崎市子ども会議子ども委員と行政区地域教育会議の子ども会議子ども委員との交流会を実施した。



特徴

子どもが自分たちの手で、子どもの権利や川崎のまちづくりなどについて活動を進める

「川崎市子どもの権利に関する条例」に基づいた活動で、子どもの自主的及び自発的な取組により運営され、子どもが話し合った方法により、子どもの総意としての意見等をまとめ、市長に提出することができる。

1年ごとにメンバーを募集し、集まった子ども委員で1年間どのような活動をするかを決めている。



成果・展望

子ども会議定例会を繰り返すことで、自分の考えを素直に表現することができるようになり、かわさき子ども集会にて、市内の子どもたちと積極的に「理想の川崎市」について自分の意見を発表することができた。

子ども地域学習推進事業(森の子ども会議)

高知県教育委員会事務局生涯学習課

【高知県】

活動概要

- 対象 県内の小学4年生～大学生（学校への周知、ホームページ等で募集）
- 参加人数 定員14人（令和元年度9人参加）
- 活動時期 7月から12月までの土日、計5回
- 活動場所 土佐山夢産地パーク交流館かわせみ、高知県森林研修センター情報交流館
- 連携協力 特定非営利活動法人土佐山アカデミー

背景目的

- 子どもの視点から地域の課題を見つけ出したり、子どもが地域を元気にするためのアイデアを出したり、子どもが体験活動の内容を企画・実施したりする、子ども主体の取組を拡大・拡充することが必要であるとの平成28年高知県社会教育委員会の提言を受け、平成30年から事業化された。

主な取組

里山の地域課題を教材とした課題解決のプロジェクト立案と実施に取り組む。

（活動内容）

【地域の課題と解決のためのアイデア出し】

- 地域の課題を見つけ出す・課題解決の方法協議・プロジェクトの立案

【プロジェクトの準備】

- 子ども自身による関係機関への依頼・関係機関との打合せ、調整等

【プロジェクトの実施】

- 放置林の竹を使って巨大ブランコ作り（平成30年度）
- 竹の棒でバームクーヘン作り（令和元年度）



特徴

小中高大の異年齢交流の中で、地域の課題について解決方法を創出する

子どもの目線から見た地域のよさ、地域の課題の検討と、その解決方法の創出のプロセスを経験する。市町村の枠を超えた小中高大の異年齢交流による仲間作り、主体性、課題解決力など多方面にわたる総合的な成長が期待できる。

なお、地域の伝統文化、自然環境など地域の魅力を子どもとともに考えることで、地域一体感を高揚することにもなっている。



成果・展望

子どもが主体的に地域を元気にし、魅力を発信するために企画の準備から運営まで全てに関わる。「巨大ブランコ作り」は竹林の活用と誘客を兼ねて、また、「竹の棒でのバームクーヘン作り」は竹の良さと竹害等について周知をするため、それぞれ、子どもたちがまちづくりの課題検討から、企画をし、実現したものである。「新しい友達が増えた」「上級生や大人を巻きこむことで、自分たちの可能性が広がった」という子どもたちの意見から、異年齢との交流を通して子どもたちの成長が実感できる活動であった。

こども未来会議室

船橋市

【千葉県】

活動概要

- 対象 市内の中学生（市内全28中学校の2年生から各校2名ずつ選出）
- 参加人数 56人（各校2名）
- 活動時期 夏休み期間中 全4回（1回7校）
- 活動場所 船橋市役所
- 連携協力 船橋市教育委員会、市内の関係団体（さざんか募金運動推進協議会、船橋商工会議所青年部、船橋法人会青年部会、船橋青年会議所）

背景・目的

- 市の現状を子供たちに伝え、まちづくりを意識してもらうとともに、将来を見据えた意見交換を行い、市政運営に子供たちの視点を活かしていくことを目的として実施。（平成26年度より実施）
- 市内の関係団体と市役所の若手職員でプロジェクトチームを立ち上げ、企画・運営している。

主な取組

【「私たちが市長になったら〇〇します！」～魅力あるまち船橋へ～】をテーマに、全市立学校で事前学習を実施。事前学習には、中学2年生の約5千人が参加しており、一人一人が船橋市民であることを自覚し、地域の発展に関わる意欲を持ってもらうようになっている。

事前学習の内容をまとめた意見を、各校2名の代表生徒が発表し、市長と意見交換を行い、その後、市長室見学ツアーを行う。

特徴

未来に向けて、子どもたちの意見を市政運営につなげる～船橋の未来に“たね”をまこう～

各校での事前学習でまとめた意見を基に、代表生徒が市長に対して発表する。市長は提案1つ1つに対して、市の現状や今後の見通しなどを丁寧に説明し、船橋市をより良くするための意見交換を行っている。



成果・展望

各学校から提案された内容については、市のホームページやSNSにおいても紹介し、報告書としても取りまとめられている。

また、これらの提案の一部は、実現に結びついている。（「梨フェスティバル」の開催、ボール遊びができる公園をつくる、等）

中学生議会

隠岐の島町教育委員会

【島根県】

活動概要

- 対象 町内中学校の3年生（4校全員）
- 参加人数 103人【令和元年度】
- 活動時期 11月13日・14日に学校別に開催【令和元年度】
- 活動場所 隠岐の島町役場4階 議会議場
- 連携協力 隠岐の島町

背景・目的

- 「隠岐びとをそだてる」ことを、ねらいとしている。
 - （だれが） 様々なふるさと学習を行った隠岐の島町の中学3年生が、
 - （いつ） 義務教育を終えるこの時期（11月～12月）に、
 - （何を考え） 愛する「ふるさと隠岐」の将来を真剣に考え、
 - （何をして） 明るい未来の隠岐を創る提案をすることを通して、
 - （どうなる） 隠岐住民の一員として「ふるさと隠岐」の将来を担う意識を高める。

主な取組

【基盤づくり】では、「ふるさと学習」として、9年間の義務教育の総合的な学習の時間などを通じて、「ふるさと隠岐」について様々な体験（職場体験、ジオパークツアー、福祉体験等）を行い、「ふるさと隠岐」の将来について考える。また、中学校3年社会科（公民）において、「地方自治」について学ぶ時間で、「広報誌やインターネットの調査、見学や聞き取り調査等を通して、身近な地域のまちづくりについて調べ、考えたことを提言としてまとめる」学習活動を行う。また、【事前準備活動】では、「町の課題についての学習」や、「課題ごとのグループワーク学習」、「議会リハーサル」等の活動を行う。【中学生議会本番】では、事前の期限までに「提案書」を提出し、議会当日には議員（全員か代表者）による提案発表をし、町長や担当課長からの答弁を受ける。



特徴

提言した内容を実現することで、「ふるさと隠岐」を担うという意欲を高める

中学生が提言した内容を町が実現させることで、生徒の意欲の向上につなげようとしている。取り入れられない案も理由を付けて説明するようにし、また、事後に、学校ごとの提案と答弁（町の今後の取組）を一覧表にまとめ、示すことで、生徒のモチベーションを高めるようにしている。今後もふるさと学習の充実、探究活動の推進、教育の魅力化などの視点から推進を図る。

成果・展望

先輩の提言が実現していることから、活動に対して意欲的に取り組もうとする生徒が増えてきている。（提言実現の例：町内にある県が作った公園へのトイレ設置、「地域おこし協力隊」を増やすことによる特産品のブランド化推進、等）また、地域における認知度も上がり、活動に協力する雰囲気も広がってきている。

長井市まちづくり少年議会

長井市まちづくり青少年育成市民会議

【山形県】

活動概要

- 対象 市内の中学生（2校）と高校生（2校）への推薦依頼
- 参加人数 中学生6人（3人×2校）、高校生8人（4人×2校）
- 活動時期 11月下旬～2月上旬の約3か月
- 活動場所 市内公共施設（会議）、長井市議会議場（当日）
- 連携協力 長井市・長井市教育委員会（共催）、長井市議会

背景目的

- 子供たちの力を未来の長井市のまちづくりに活かせるように、その1つの手段として、「長井の心を育む少年議会事業」を実施。（平成16年度より実施）
- 民主主義、議会制度を体験・学習しながら、長井市が抱えている課題・問題について考えること、「未来市民」の立場で、自分たちの夢や希望を叶えるためにはどうしたらよいか、今後長井市をより良くするためにはどう行動するかを考え、提言することを目的として実施。

主な取組

始めに議会制度や長井市の施策について学び、市政やまちづくりに関する質問や提言を子供たち自身と考えてもらう。

さらに、地域の大人や市職員等がアドバイスをして内容を掘り下げた上で、当日は実際の議会と同様に質問・提言と市長等の答弁が行われる。

子供たちの質問・提言内容の掘り下げについては、随時検討し改善を行っている。

特徴

「長井の心」を育み、「長井の心」によって培われた子供たちの力を未来のまちづくりに活かす

長井市では、名誉市民である故長沼孝三氏が、ふるさと長井への想い・願いを「長井の心」として表現。

市では、その「長井の心」を育む取組が市内各校で行われており、「長井の心」によって培われた子供たちの力を未来の長井市のまちづくりに活かせるように、「長井の心を育む少年議会事業」を実施している。



成果・展望

「ホストタウンであるタンザニアとの交流を深めるために、市の将来を担う中高生を現地に派遣してはどうか」という少年議員の質問が市の方針と合致したことにより、中学生2名が市民訪問団に参加しタンザニアの人々と交流するなど、実際の施策につながる事例があった。少年議員の活動は市報や学校だよりで報告され、アフリカ開発会議のイベントの中でも紹介された。少年議員の質問を受けて市議会議員が実際の議会で質問するなど、地域でも注目を集めている。

茅野市ぼくらの未来プロジェクト

茅野市教育委員会

【長野県】

活動概要

- 対象 市内の中学校及び高校に通学する者（各学校へのチラシ配布、学校訪問）
- 参加人数 28人【令和元年度】
- 活動時期 概ね月に2回の定例会（平日の夕方18時～20時頃まで、年間24回程度）、及び複数回の企画（年間2・3回程度、宿泊を伴うこともある）
- 活動場所 茅野市こども館会議室（公共施設）
- 連携協力 どんぐりネットワーク茅野、諏訪圏青年会議所、他

背景・目的

- 市では、平成20年から「茅野市こども会議（中高生が集まり、まちづくりについて意見交換及び提言をする機会として市が企画）」を開催してきたが、中高生が話し合い、提言をするだけではその場限りになってしまうという課題が出てきた。
- そのため、子供たちの意見や提言を子供たち自身が実際に行動に移していく場として、平成25年に「茅野市ぼくらの未来プロジェクト」を発足した。

主な取組

月に2回の各定例会では、その年に実施したい企画についての話し合いをしている。また、「茅野市こども会議（愛称：愛してるぜ茅野ミーティング）の企画及び運営」、「古本カフェの開催」、「市内行事におけるプレイパーク（冒険遊び場）の開催」、「茅野駅前アイスキャンدل作り」、「バレンタインイルミネーション」などの活動を実施している。

特徴

子供たちが夢を持ち、叶えることができる、自己実現を応援する

子供たちが主体性に目覚めて自立に向かい、自分の夢の実現を目指してほしいという願いを込めて、本事業を実施。

当初は、子供たちと職員で企画を進めてきたが、次第に、高校を卒業したOB・OGや、活動に賛同する市の関係団体からも「活動を手伝いたい」という声が上がることになったため、そういった方々も事業に参加できるよう、サポーター制度を導入した。

サポーターの方は、定例会等の行事に出席し、子供たちに助言を行い、あるいは会議のファシリテーターとなって、事業の推進に協力している。



成果・展望

例えば、「古本カフェ」は、「大型書店がなくなったまちに古本とカフェで元気を生み出したい!」という思いで企画・実施。古本の回収を6月のこどもまつりで開始し、9月までに約2,000冊の古本を集め、220人を超える方がカフェに来場した。ミニプレイパークの開催など、その他の活動も、メンバーのまちづくりへの思いがカタチとなって表れてきている。

揖斐ジモト大学

揖斐川町

【岐阜県】

活動概要

- 対象 町在住の中学生・高校生、揖斐高等学校の在校生
(ウェブサイトで募集、チラシを各学校及び揖斐駅で配布)
- 参加人数 47人【令和元年度】
- 活動時期 7月28日～8月25日、9日間、計8プログラム【令和元年度】
- 活動場所 役場等公共施設、駅舎、診療所、工務店、工事現場、ゲストハウス、等
- 連携協力 揖斐川町未来センター会議

背景目的

- 少子化に加え、就職や進学で更に若者が町外に出て行くことで、将来地域を担う人がいなくなるという課題認識がある。①若者に自分たちの地域に関心を持ってもらう、②地域に貢献する次世代の人材育成、をねらいとして活動を実施。(令和元年度より実施)
- 中高生が就職・進学で地域を離れる前に、学校では学べない「地元のヒト・モノ・コト」を地域の大人と学ぶ取組を通じて、子供たちのあらゆる課題に対して探求する力を育てたり、地域の一員であることを感じたりしてもらうことを目的としているプログラム。

主な取組

住民と職員で町の未来を考える「未来センター会議」が企画し、地元から離れる前の中高生を対象として実施。
地元の中高生が、地域で活躍する大人(和菓子職人、まち医者、イベントプロデューサー、建設業者、ゲストハウスオーナー、鉄道の存続に励む人、ボランティア実践者)との対話を行った。
各回、90分～最大7時間のプログラムで実施。講話だけでなく、それぞれの職業等に関する体験活動等も実施した。



特徴

～ジモトの大人とジモトで学ぶ。さあ、会いに行こう。～
揖斐川町で活躍する大人に会いに行き、その人の生き方・価値観に触れ、本気で向き合う、対話プログラムとして実施。
「ジモト」の大人との対話を通じて、将来のことや地域のことについて学び、考える機会となっている。

成果展望

アンケートでは、参加者の9割以上が地元にも魅力的な職場があると感じ、また、自分の将来について考えることができたという回答があった。講師の大人たちも、中高生に伝える中で、次の世代を育てることの大切さに気付くようになっている。

こなん政策アカデミー

湖南省

【滋賀県】

活動概要

- 対象 1チーム3人以上で、【13歳以上40歳以下の人をチームに一人加える】、【各回にチームとして参加する】、【フィールドワークを行い、大学教授からのアドバイスを受けて政策提案できる】の条件を満たすこと（メールで応募）
- 参加人数 上記条件を満たす中でチームとして参加
- 活動時期 8月～12月に全3回の日程、その間にチームごとにフィールドワークを実施
- 活動場所 サンライフ甲西2階大ホール、甲西文化ホール（最終発表）
- 連携協力 同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科

背景・目的

- 若者に市政やまちづくりに関心を持ってもらうため、平成30年度から開講。本事業をきっかけに参加者を移住・定住事業や、地域の担い手につなげることも目的としている。
- 平成29年度には「未来湖南省政策コンテスト」として開催していたが、平成30年度からは、コンテスト形式ではなく、「政策形成パートナー発掘事業」として、市にとって有益な提案は、次年度に参加者との協働により政策に反映し、実現していく形式として実施している。

主な取組

開講8月、中間発表10月、最終発表12月として開催し、同志社大学の学部生や院生によるサポートを受け、各チームが政策提案を行う。

平成30年度は7チーム、平成31年度は6チーム(大学生、市職員、市内銀行、子育て世代の母、市内の中学生、市内の高校生)により、空き家活用、子育て支援、高齢者支援、シティプロモーション、移住定住施策、若者による施策などの提案が行われた。



特徴

有益な提案は、次年度に参加者との協働により政策に反映し、実現する

平成30年度では「もし、湖南省の中学生が100万円を使ってまちづくりに取り組んだら？」について提案した内容が認められ、事業内容を提案者と精査することで、「中学生アイデアキャンプ」として事業化することとなった。

令和元年度も提案された内容を次年度以降に実施する予定である。



成果・展望

「地域のことを考えたり、政策について学んだりなど、普段なかなかできない経験ができた。」「計画を立て、物事を主観的にではなく、客観的に見て考えることの重要性を学んだ。」などの感想があった。令和元年度は高校生による地域活性化に関する提案を事業化する予定である。

生涯学習講座「高校生議会」

弥富市教育委員会

【愛知県】

活動概要

- 対象 市内に在住の高校生及び市内の高校に通学している高校生
(広報及び弥富市役所ホームページに掲載し、募集)
- 参加人数 16人(3～5人のグループでの申込みも可能)【令和元年度】
- 活動時期 7月～10月までの期間で3回
- 活動場所 弥富市総合社会教育センター、弥富市役所十四山支所及び弥富市議会本会議場
- 連携協力 弥富市、弥富市議会

背景目的

- 選挙権の年齢が満18歳以上となったことを受け、高校生に政治や地方行政への関心を高めてもらうため、生涯学習講座の一環として高校生による模擬議会を実施。令和元年度に初めての開催。

主な取組

「弥富市をいつまでも住み続けたいまちにするにはどうしたらよいと思いますか?」をテーマに研修会とグループワーク(勉強会)を実施。

市職員から議会の役割と弥富市の現状として「まちづくり」「防災」「観光」のテーマに沿った説明をし、その後テーマに分かれてグループワークを行った。グループでは、それぞれのテーマに沿った弥富市の良い点、悪い点、そして提案したいことを話し合った。

また、グループワークの結果を意見書としてまとめ、市議会本会議場(模擬議会)で意見発表を行った。この他、勉強会の中で模擬選挙体験をした。



特徴

弥富市のことについて、市の若手職員らと一緒に考える

グループ討議では、市の若手職員をファシリテーター役とし、高校生が自由に発言できるような雰囲気作りを心がけた。

また、勉強会にはテーマごとに市の担当職員がアドバイザーとして関わり、模擬議会では、議場で発表を行い、市長・副市長・教育長から講評を受けた。

成果・展望

高校生からのアンケートでは、「いろいろな課題がある中で、どのように改善すべきかなどを考えたりして、良い経験ができた」、「普段日常では深く考えないことを、他の参加者の方と話し合い議場で発表するという貴重な体験ができてよかった」、「弥富市を作り上げるのは市長さんたちだけでなく私たちも関わっていることが分かりました。」などの感想が見られた。

高校生による投票事務従事体験及び 選挙啓発活動

福岡市選挙管理委員会

【福岡県】

活動概要

- 対象 市内の市立高校に通う生徒（学校及び教育委員会へ依頼文書の送付）
- 参加人数 ①投票事務従事体験7～15人、②選挙啓発活動3～15人
- 活動時期 選挙期間前から選挙当日にかけて
- 活動場所 ①各区役所の期日前投票所
②スタジオ、駅周辺、区役所、学校で撮影後に市内街頭ビジョンで放映
- 連携協力 福岡市教育委員会

背景目的

- 実際の投票所の事務を体験してもらうことにより、若者の選挙への理解と関心を高め、投票参加へとつなげてもらうことを目的に、選挙啓発の一環として実施。（平成28年7月参議院議員選挙より実施）

主な取組

「投票事務従事体験」では、事前研修を行い、選挙に関する基礎知識や投票事務について知った上で、実際の投票所での事務を行った。

（活動の内容）

【①投票事務従事体験】

投票事務従事希望者が研修を受講後、投票事務（選挙人案内、投票用紙交付、場内整理、投票箱監視に係る事務等、投票管理者が指示するもの）に従事。

（平成30年11月市長選挙15人、平成31年4月統一地方選挙7人、令和元年7月参議院議員選挙11人）

【②選挙啓発活動】

- ・ 駅周辺で生徒と明るい選挙推進協議会委員が啓発活動（平成30年11月市長選挙8人、令和元年7月参議院議員選挙7人）
- ・ 地下鉄構内放送の製作（平成30年11月市長選挙7人、令和元年7月参議院議員選挙5人）
- ・ 独自シナリオで動画撮影、市内街頭ビジョンで放映（平成30年11月市長選挙13人）
- ・ 学校校内放送にて投票呼びかけ（令和元年7月参議院議員選挙）



特徴

高校生が実際の投票所での事務を経験することで、選挙に関する知識を身に付け、関心を持ってもらう

高校在学中に投票する機会を持つ生徒がいることもあり、主権者教育を学校教育の中で取り組んでいくことが重要となっている。選挙管理委員会と教育委員会との連携・協力の下、多くの生徒に選挙を通じた政治参加をより身近に感じてもらえるように活動を推進する。

成果・展望

投票事務従事体験に参加した高校生からは、「選挙の仕組みが分かる良い経験になった」、「投票までの流れが分かった」、「選挙権を得たら投票に行く」といった感想が聞かれた。

生徒にとって、選挙に関する知識を身に付け、関心を持つ機会になっている。



様々な環境下で幼児の主体性を育む体験活動



もりっこ

神奈川県立足柄ふれあいの村

【神奈川県】

活動概要

- 対象 県内の幼児（3歳以上～未就学児）とその保護者（電話及びホームページの専用申込みフォームより応募）
- 参加人数 1回あたりの定員25人
- 活動時期 5月、7月、11月、2月
- 活動場所 神奈川県立足柄ふれあいの村
- 連携協力 株式会社アグサ・関東学院グループ（指定管理者）

背景・目的

- 足柄の森やその周辺の自然を舞台に、五感を使った体験を通して、自然の中で活動する楽しさを肌で感じることを目的として実施。（平成28年度より実施）
- 四季折々の足柄の森の中で、親子で森あそび・野あそびなどを体験する。

主な取組

土曜日や日曜日に、日帰りで参加しやすいように回を設定。午前中に森の散策をし、午後は体を動かして森の中で遊ぶ。例えば5月の会では、「初夏の自然とふれあおう」と題し、森の中でいろいろな夏の生き物を探す。

11月の会では、「おちばであそぼう」として、森の中に用意した落ち葉プールで遊んだり、たき火・焼き芋をしたりする。

（活動内容）

- 集合→オリエンテーション→森さんぽ（森の中を散策する）
- 昼食（弁当持参）→森のお話会（紙芝居の読み聞かせ）
- 森あそび（森の中で遊ぶ）→解散



特徴

四季折々の森の中で、親子で様々な体験をする

子どもたちは、森の中で、四季に応じた様々な遊び・体験をする。

その中で、子どもたちが一緒に遊び始め、親子で協力するような仕組みを事前に用意する。また、実際の活動においてはスタッフからのサポートは必要最小限に留めるようにしている。

成果・展望

最初は緊張していた子どもたちが、1日の活動の後半には仲良く遊ぶことができおり、活動を通して子どもたちの社会性が育まれている様子を実感できた。また、生き物や植物などに興味をもち、虫を率先して触るなどの変化も見られた。保護者からも『『まだまだ子どもだから』と思ってやらせていなかったことを、楽しそうにやっている様子を見ることができた』といった声を聞くことができた。

森のようちえん もくもく

美里自然学校・熊本県立豊野少年自然の家

【熊本県】

活動概要

- 対象 県内の未就学児とその保護者（電話、Eメール、専用申込みフォームにて申込み）
- 参加人数 255人（全6回合計）【平成30年度】
- 活動時期 5月19日、6月30日、11月17日、12月1日、2月9日、3月9日【平成30年度】
- 活動場所 やすらぎの交流施設元気の森かじか、熊本県立豊野少年自然の家
- 連携協力 美里自然学校と熊本県立豊野少年自然の家の共催

背景目的

- 県立青少年の家と、民間が管理する自然学校で、対象・プログラム等類似した事業もあり、お互いのスタッフ不足を解消、ノウハウを共有するという意味でも共催事業が実施できないかとの意見を基に、共催での実施に至った。
- 自然の中に出かけたり、田畑で土に触れる体験や季節の食材を食する体験、又は、地域の方と交流を通して保護者の方と一緒に、乳幼児期の子供たちの豊かな感覚や感性を引き出し、育てていくことを目的として企画・実施している。（平成27年度より実施）

主な取組

「土とのふれあい（森のおさんぽ、自然体験）」、「食とのふれあい（料理体験、おやつ作り）」、「人とのふれあい（地域の人とのふれあい、縁側でのふれあい）」に関する活動を実施している。

（平成30年度、活動の内容）

5月 小川遊び・生き物探し	6月 そうめん流し
11月 ピザ作り	12月 リース作り
2月 森のおやつパーティー	3月 春の里山探検



特徴

「土・食・人」を大切に、県立施設と民間施設との共催で、プログラムを検討

約5年間共催で事業を実施しており、実施回数や内容を検討しながら、より良いプログラムが提供できるよう毎年検討している。また、より多くの方に体験の機会を提供できるよう、ホームページ・SNSをはじめ、広報誌等も活用しながら、広報活動に取り組んでいる。

成果・展望

複数回、又は、全回参加する幼児（家族）もおり、ほとんどの幼児が、回を重ねるごとに積極性が見られるようになり、親から離れて活動できるようになっている。また、活動を通して、参加者同士での交流や協力なども自然とできるようになっている。

今後とも、本事業を通して子供たちの五感を刺激するような「本物」に触れる体験を大事にしていき、豊かな心の育成に努めていきたい。

乳幼児を対象とした文化・芸術体験事業

世田谷区教育委員会

【東京都】

活動概要

- 対象 世田谷区立幼稚園・保育園等に通う幼児
- 参加人数 約400人
- 活動時期 年4回（2回×2園）
- 活動場所 区立幼稚園・区立保育園
- 連携協力 公益財団法人せたがや文化財団

背景・目的

- 区の幼児教育・保育の方向性を示した「世田谷区幼児教育・保育推進ビジョン」を平成29年7月に策定。ビジョンの基本方針の1つである「文化・芸術と触れ合うための各園等における環境づくり支援」の一環として、子供が、気軽に文化・芸術に触れることができ、様々な経験を積み重ね、興味・関心を広げることができるような取組を進めていくため、令和元年度より乳幼児を対象とした文化・芸術体験のアウトリーチ事業に取り組んでいる。

主な取組

「コトコトさんのドレミ図書館」と、「どこでも文学館」の取組を実施。「コトコトさんのドレミ図書館」は、マリンバの演奏に乗せて「物語」や「うた」を聴かせるプログラム。事前に園の状況等を確認しプログラムの内容を検討した。

「どこでも文学館」は、絵本作品を題材として世田谷文学館（せたがや文化財団）が制作した出張展示用バナーセットを1か月間展示をするもの。幼児、保護者の動線等を考慮して展示し、また、エントランス部分のスペースに作家直筆のイラストを数点展示して、展示空間を盛り上げた。



特徴

芸術・文化を、アウトリーチ（出前）することによって体験できるようにする

芸術・文化を、幼児たちが美術館、図書館、劇場等へ出向くのではなく、各園へアウトリーチ（出前）することによって体験できるように実施している活動である。

「コトコトさんのドレミ図書館」では、あえて絵本や映像を使用せず、生の演奏と歌声で、幼児たちの想像力を刺激した。幼児たちは、演者を間近に見ながら、指先でリズムをとったり、歌を口ずさむなど、自分なりの仕方でもコンサートを楽しんでいた。

「どこでも文学館」では、バナーのサイズが大きいので迫力があり、幼児や保護者が寄ってくるきっかけとなった。また、バナーとともに、絵本や直筆イラストも展示しており、園内に取り揃えていない絵本を幼児が毎日楽しそうに読んだり、保護者が直筆イラストに興味深げに見ている姿があった。

成果・展望

「コトコトさんのドレミ図書館」のアンケートでは、プロの生演奏、生の歌声に触れられる体験であり、感動を共有できる貴重な時間だった、という感想があり、幼児たちが音楽や芸術に興味・好奇心を持つためのきっかけ作りの1つとなった。

「どこでも文学館」の展示期間中には、園内に設置した本棚の傍らで、保護者が子供に読み聞かせする姿が見かけられた。保育士からのアンケートでは、作品世界を知るきっかけや、本を通じたコミュニケーションを育むきっかけとなったとの感想や報告もあり、まだ自分では物語を読めない小さな子供たちにも、本の楽しさを伝えることができている。

綱づくり体験 ちびっこ綱武士！

与那原町立与那原東幼稚園・与那原町教育委員会

【沖縄県】

活動概要

- 対象 町立与那原東幼稚園の園児
- 参加人数 園児66人、職員12人【令和元年度】
- 活動時期 運動会（10月）で実施
- 活動場所 与那原東小学校体育館
- 連携協力 与那原町学校ボランティア・与那原町綱曳資料館・綱曳関係者・劇団おばあQ

背景・目的

- 「与那原大綱曳」は、440年の歴史と伝統を持つ。
- 地域教育資源を活用し、自分たちの生まれ育った地域の行事に興味や関心を持てるように幼児期から親しむ。
- 「ふるさと」のよさを知らせる、郷土愛を育てる、地域の伝統文化の継承、地域の未来を担う人材育成、等を目的として実施。（平成14年度に研究テーマとして取り組んだことが始まり）

主な取組

「与那原大綱曳まつり」のポスターを園内に掲示し、綱づくり体験や、綱曳の由来に関する紙芝居の読み聞かせを行う。
また、実際に綱曳に携わっている方を招いて、綱曳を実施。旗頭、金鼓隊、前舞など、本物と同じ役割を配分して体験する。



特徴

体験を通じて、地域の人や文化等とつながる

地域の人や文化等とつながる貴重な体験であると考えられる。今後も教育的価値を十分に理解しながら継続して実践していきけるようにする。

なお、「与那原大綱曳まつり」にも、園児は家族で参加し、運動会で綱曳を取り入れている。また、小学校は田植えや稲刈りした藁の贈呈をし、中学校は太鼓を叩く金鼓隊や前舞いで参加する。子供から大人まで、幅広い世代が地域と関わりを持って、「綱曳」に関わっている。



成果・展望

地域の伝統文化を教育活動として取り入れていることで、子供たちの感動体験となり、自分たちの住んでいる町への愛着が湧いているものと考えられる。保護者からの嬉しい声も届いている。
（運動会の感想より。「綱曳では、与那原の綱曳の文化を体験した感じで、町民の気持ちに一步近付けたと思います。」）

森のようちえん「たこたこくらぶ」

明石市立少年自然の家

【兵庫県】

活動概要

- 対象 市内に住む年中・年長児（幼稚園・保育園にチラシ配布、市の広報誌で募集）
- 参加人数 1回につき25人
- 活動時期 全6回、全て日帰り(10～15時)
- 活動場所 明石市立少年自然の家、及び、その近隣・海岸
- 連携協力 特になし

背景目的

- 感受性豊かな幼少期の子どもたちへの自然体験の機会を増やすために2年前から企画を始め、令和元年度から実施。
- 明石市立少年自然の家の施設内だけでなく、近くの海岸や川、公園などをフィールドに、多少雨が降っても外に出かけていき、全身で自然を感じて遊べる活動を目指している。

主な取組

年に6回の活動を実施。

例えば、第1回の活動は「海遊び大作戦」として、午前は江井島の海に出かけていき、海に入って遊んだり、砂遊びや生き物探しをしたりして遊び、午後は自然の家でたき火に挑戦。また、どんぐり拾いやオニゴッコなど、無限の遊びが展開された。

(活動内容)

- | | |
|-------------|--------------|
| 第1回 海遊び大作戦 | 第2回 秋の江井島探検隊 |
| 第3回 おにぎり大作戦 | 第4回 焼き芋大作戦 |
| 第5回 お餅つき大作戦 | 第6回 たき火大作戦 |



特徴

晴れの日も、曇りの日も、多少の雨の日も、全身で自然を感じて遊べる活動を行う

「自然の中の活動を通じ、子どもたちの感性を育む」、「自ら感じ、考えて創意工夫し、試行錯誤を繰り返しながら発想力や判断力を身に付ける」、「子どもたちの主体性を大切にする（スタッフは過度に干渉しない）」といったことを意識して活動を実施している。

成果・展望

秋から始まったプログラムであったが、暖かい日には、全身浸かって海にジャブジャブ入る子がいたり、砂遊びや岩場での生き物探しなどいろいろな遊びを展開していた。また、たき火ではどんなものが燃えるかなど考えて火の中に入れるなどの工夫が見られた。

雨の日の活動では「雨も気持ちがいいね」など雨を楽しむ声もあった。

食育ネットワーク事業

上士幌町・上士幌町教育委員会

【北海道】

活動概要

- 対象 町内の認定こども園の園児、年長（授業内での開催）
- 参加人数 30人程度
- 活動時期 毎年秋頃
- 活動場所 認定こども園
- 連携協力 保健福祉課、農林課、上士幌町認定こども園ほろん、学校給食センター

背景目的

- 教育、農林、保育、保健福祉などの関係課が連携し、食育を推進することを目的とした事業を実施。「上士幌町食育・地産地消促進計画」を策定するなどして推進している。
- 認定こども園において、自らが暮らす町の地場産品について知ることや、「いのち」を頂いて生きていることを実感し、食や命に対する感謝の気持ちを持つきっかけとすることを目的として、体験的な活動を実施。（平成25年度より実施）

主な取組

読書コーディネーターの方から、はちみつの絵本の読み聞かせをしてもらい、また、町内の養蜂家と連携し、はちみつ分離体験等を実施。

蜂の巣やはちみつについての講話、はちみつの採り方レクチャー、遠心分離機のハンドルを回しての分離体験、巣箱から直接はちみつを食べる体験、はちみつを使ったお菓子作りを経験。



特徴

旬のモノについて、“生”の体験をする

季節に合わせた旬のものを教材にするようにし、また、なるべく“生”の体験となるよう心掛けて実施。

なお、認定こども園ほろんでは、建物の中心にガラス張りの給食室があり、調理中の様子がいつでも見られるようになっている。また、園の畑で子供たちが育てた野菜を使って給食が作られたり、地元産の食材にこだわるなどの取組を行っている。

成果・展望

“生”の教材に触れることによる高揚感や、加工前の実物を五感を使って感じる事ができている。

あひるクラブ

原村教育委員会

【長野県】

活動概要

- 対象 村内の就園前の幼児と保護者(有線放送、保育士による親への呼びかけ)
- 参加人数 25人(11組)~64人(30組)【平成30年度】
- 活動時期 4月~次年3月、ほぼ月1回、12回
- 活動場所 原村中央公民館、原消防署、八ヶ岳中央農業実践大学校
- 連携協力 保育士、原村消防団、音楽講師、原村図書館、原村中央公民館利用登録団体、原村更生保護女性会、栄養士 等

背景目的

- 幼児期にとって大切な親と子供のスキンシップを遊びの中から学ぶ。あわせて、親同士の仲間作り、情報交換の機会とする。
- 保護者のみを対象にした子育て支援のプログラムは別途「子育て塾」で実施。「あひるクラブ」の活動は、親子で楽しい活動を体験するものとして実施している。(平成6年度から前身の「母と子の遊びの広場」が始まり、平成12年度から「あひるクラブ」として実施)

主な取組

年間計12回、下記の内容で、季節に応じた遊びや、文化・生活体験活動等を実施。(内容は変更になる場合があります)

(活動内容)

- ①開校式(みんなで仲間作り)
- ②消防署見学(消防車、救急車を見に行こう)
- ③室内運動会(室内ゲームと運動会)
- ④リトミック(親子で楽しくリトミック)
- ⑤紙遊び(お絵描き、落書き、貼り絵で遊ぶ)
- ⑥秋の遠足(八ヶ岳中央農業実践大学校、動物とのふれあい)
- ⑦ハロウィンパーティー(仮装していたずらしちゃう)
- ⑧絵本に親しむお話し会(絵本、紙芝居の読み聞かせ)
- ⑨クリスマス会(パネルシアターとクリスマス会)
- ⑩まゆ玉作り(子供の健やかな成長をまゆ玉に込めて)
- ⑪お面作りと豆まき(みんなで豆まき「鬼は外」)
- ⑫手作りおやつでお茶会(お茶会をしながら1年間の振り返り)



特徴

地域ぐるみで「親子で楽しく育児と育自そして仲間作り」を推進

消防団、音楽講師、図書館、栄養士等の多様な連携・協力により、年間を通じて、地域ぐるみで様々な活動を実施。

安全面に配慮しつつ、より楽しい経験ができるように活動内容を見直しながら、親と子供のスキンシップが多くなるような活動を実施している。

成果・展望

活動を通じて、親同士の情報交換や仲間作りができています。

また、地域の人たちとの交流の機会、地元の文化を知る機会となっている。

かわさき森のようちえん/ 【親子】かわさき森のようちえん 川崎市青少年の家【神奈川県】

活動概要

- 対象 かわさき森のようちえん：市内の年少～年長の幼児(子どものみ)、【親子】かわさき森のようちえん：市内の1～3歳児とその保護者(親子参加) (チラシ配布、ウェブサイト、市政だよりで募集)
- 参加人数 かわさき森のようちえん：登録13名、平均8名【令和元年度】
親子かわさき森のようちえん：平均4組、多い時で10組【令和元年度】
- 活動時期 年度内5月～3月まで、1期あたり4回～6回で実施(令和元年度は3期、回数14回)
- 活動場所 川崎市青少年の家 園庭
- 連携協力 指定管理者で運営、代表企業：株式会社東急コミュニティー、構成企業：NPO法人国際自然大学校
公益財団法人川崎市スポーツ協会

背景目的

- 子どもたちの自由な発想をベースに展開される「遊び」を重視した、自然の中での保育/育児の総称である「森のようちえん」。「森のようちえん」の考え方にに基づき、都市部における小さな自然環境の中でも、大いに子どもたちの潜在能力を引き出し、伸ばすことのできる活動を展開する目的で活動を始めた。(平成28年度より実施)

主な取組

子どもたちが好きで活動している遊びは、虫取り、泥遊び、たき火が多い。興味としては木登りやひみつ基地作りもある。これらの活動について、「子どもたちの自由な発想で」、「豊かな想像力から、遊びを作り出す創造力を引き出し」、「取り巻く自然環境、友達関係等から様々な気付きを見出し」、「そこで一緒に過ごす友達やスタッフとの関係性を築く」ことを大切にしているゆえに、特別な仕掛けはしていない。「遊びの始め」だけ手伝った後は、子どもたちの発想の下で展開される遊びに寄り添い、ともに活動し、共感しながら過ごしている。



特徴

子どもたちの「やりたい」が達成できるよう、子どもたちの発想を大切にする

「きっかけ」を提示することはあるが、基本的には子どもたちの「やりたい」が達成できるような関わり、声掛けを行う。一方で「自由の中の責任」を知ることが大切であり、「自分だけがよければ、自分だけが楽しければいい」という場面があった場合は、社会性を身に付けてもらうためにも、適切な声掛けができるよう、見守っている。【親子】の活動では、親もある意味童心に帰って遊んでもらうようにしている。結果、親も「楽しい」と思え、子どもが持つ新たな側面に出会うことができる。

成果・展望

その場で出会った子同士が、たまたま生まれた遊びを通し、仲良くなっていく。徒党を組んで「仲間」を意識していく様子が見られる。大人にない発想で遊び、自分で考え、楽しいと思ったことに夢中になっている様子は、幼児期における人間形成の礎になる。

食育教室

養父市・養父市教育委員会

【兵庫県】

活動概要

- 対象 市内の3・4歳児とその保護者（お便りで募集）
- 参加人数 20人前後
- 活動時期 4月～9月に園で野菜の栽培、10月第1週の1日でクッキング
- 活動場所 小佐ふれあい倶楽部
- 連携協力 いずみ会

背景目的

- 小佐保育所の例年の取組として、食育教室とクッキングを実施。市内の各園でも、食育実践活動として、野菜作り・親子食育講座・アレルギー除去食など充実した給食の提供等を行っている。5歳児には、「キッズキッチン事業」も実施している。
- 養父市では平成31年3月に「第3次養父市食育推進計画」を策定。「正しい食習慣」、「子供の実践力の向上と食育活動」、「食と農（地産地消・郷土料理）」の計画の3つの柱により、家庭と連携しながら、地域として食育を推進している。

主な取組

4月～9月の時期には園で野菜を栽培。
10月のクッキングの日は、地域の集会場である「小佐ふれあい倶楽部」で活動を実施。いずみ会の方から紙芝居や劇、実際に地域で採れた野菜を使うなどして、食育について話を聞く。
その後、園で収穫した野菜や季節の野菜を使っていずみ会と親子でクッキングを行い会食する。



特徴

保護者・祖父母も活動に参加し、家庭での食育を推進する

活動には、保護者だけでなく祖父母にも参加を呼び掛けている。活動の中でクッキングを行ったレシピで、家庭でも料理をした話が聞かれているなど、家庭での食育の取組にも影響が見られる。



成果・展望

食事のマナーや食べる大切さ、命を頂く、「まごわやさしい」（和食の食材の頭文字の語呂）などを聞く中で、子供たちが食事中に教わったことを話す姿があり、保護者も意識して子供の食べる様子を見るようになってきている。
良い場面に気付いて褒めてもらえることは、子供にとって良い環境となっている。

槇島ほうきの伝統を体験する

庄内町立余目第一幼稚園

【山形県】

活動概要

- 対象 町立余目第一幼稚園の年長組
- 参加人数 30人程度
- 活動時期 6月苗植え～1月ほうき作り
- 活動場所 庄内町立余目第一幼稚園
- 連携協力 庄内町立余目第一幼稚園保護者会、槇島ほうき手作りの会

背景目的

- 庄内町の特産品である高級ブランド「槇島ほうき」について材料から完成までを学び、体験。
- 「槇島ほうき」は庄内町槇島地区に200年続く伝統農芸品であり、代々受け継がれてきた材料になるタカキビの種子をまき、栽培し、収穫して、「ほうき」にする。
- 地域に伝わる伝承文化との出会いを大事にしたいという幼稚園のコンセプトの下、平成24年度から取り組んでいる。平成28年度から実際にほうき作りに取り組んでおり、槇島ほうき手作りの会の方々と協力を得て実施している。

主な取組

槇島ほうきの材料となる、ほうききびの苗植えから管理、収穫までを体験し、刈り取った後は、地域の方である「槇島ほうき手作りの会」の方を講師に卓上用ほうき作りを行う。

20cmほどの苗を植え、子供たちが草取りや水やりを一生懸命やり、2mほどに成長したほうききびを手伝ってもらいながら収穫、親子でほうき作りを体験する。

(活動の内容)

- 6月：苗植え、苗植え後刈り取り時期まで除草と水やり
- 8月：刈り取り
- 1月：親子での卓上用ほうき作り



特徴

地域の人との交流の中で、栽培から収穫、作成まで、ほうき作りを通じて学ぶ

保護者や、槇島ほうき手作りの会の方々とともに活動を実施。地域の様々な人からの協力を得て、栽培から収穫、作成まで、伝統農芸品であるほうき作りを体験する。作成したほうきは、実際に家庭で使用する。



成果・展望

親子でほうきに色とりどりの糸を巻き付け、一緒に作業を進める。そして世界で1つだけの作品を完成させる。

地域の伝統文化を、親子で学び、体験することで地域のよさを再発見できる活動になっている。

ひのき教室

野田市関宿中央公民館

【千葉県】

活動概要

- 対象 市内の就園前の子どもとその保護者
(市報、ホームページ、チラシ、ポスターで募集)
- 参加人数 平成29年度延べ661人、平成30年度延べ781人
- 活動時期 6月～1月、全12回
- 活動場所 野田市関宿中央公民館
- 連携協力 千葉県立清水高校、野田市消防署、野田市立関宿南部幼稚園、劇団「ふうせん」、保育ボランティア「ぴいたあぱん」

背景目的

- 昭和50年に旧関宿町において公立幼稚園が開園した際、入園前の備えや集団になじめるよう開始した。親子の絆作りや子どもの社会性を培うことを目的として実施。
- 5月に申込みをし、6月の開講式・レクリエーションから、1月のお店屋さんごっこ・閉講式まで、全12回の楽しさいっぱいのプログラムを経験する。

主な取組

講師を中心に、年間で計12回、「自然体験」、「生活・文化体験」、「社会体験」のそれぞれに関する、親子参加での遊びや創造活動を行う。親子での運動遊び等の活動も実施している。

(活動の内容例)

【自然体験】館外バス遠足(公園)

【生活・文化体験】七夕飾り作り、しゃぼん玉作り、人形劇、クリスマス会、音楽鑑賞

【社会体験】お店屋さんごっこ、館外バス遠足(工場見学)



特徴

親子参加型の活動を通じて、良い親子関係作りとともに子どもの社会性を育てる

様々な活動があり、全て親子参加型であることが、良い親子関係作りに役立っている。

子どもについては、回を重ねるごとに、大きな声で挨拶や返事をし、親から離れ一人遊びや片付けができるようになっていく。

保護者には、毎回教室終了後に「子育て日記」に学習の内容、感想、悩み、相談などを記入してもらっている。教室終了後の親同士の交流も見られるようになった。

成果・展望

各回の活動が単に楽しむだけに終わらず、年間の諸行事に合わせた活動を通しての社会性を育てたり、親同士の交流、情報交換の場として、子育て支援の役割を果たしている。

はやしまプレーパーク

早島町教育委員会

【岡山県】

活動概要

- 対象 町内の就学前幼児（広報紙、チラシで募集）
- 参加人数 各回約30人（幼児・保護者）
- 活動時期 毎月第3土曜日、午後1時30分～午後4時
- 活動場所 早島町町民総合会館（ゆるびの舎）北の「ぞうさん広場」
- 連携協力 吉備国際大学（教員・学生）、地域のボランティア等

背景・目的

- 平成30年度から「命の根っこは遊びで育つ」をキャッチフレーズに、子供の自由な遊び場の確保と保護者の子育て支援をねらいに実施している。
- 令和元年度は毎月の開催に変更し、遊びの楽しさや多様性を知るとともに、自分の体力や危険を判断・察知する力を養うこともできる「冒険遊び場」を提供している。

主な取組

月に1回、「ぞうさん広場」でプレーリーダーの大人のボランティア（地域の方や大学教員・学生）、小学生とともに、子供同士で遊んだり、子供と保護者が遊んだりする。

子供たちを見守る大人のプレーリーダーと一緒に、遊具を使った遊び、工作、体を使ったゲーム、生き物とのふれあいなど、その場を自由に使って思いのままに遊ぶことができる。



特徴

プレーリーダーと一緒に、「自分の責任で自由に学ぶ」

子供がやりたいことを何でもできる遊び場として、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーとしている。

また、保護者は子供の遊びを見守ったり、一緒に遊んだりするとともに、子育てについての情報交換ができるようになっている。親子と一緒に遊ぶ中で親子の絆も深まり、プレーリーダーと保護者、保護者相互の人間関係、家庭と地域との連携も深まっている。



成果・展望

毎月第3土曜日に実施する中で、一定数の子供と保護者が「ぞうさん広場」に集い、遊ぶようになった。

また、参加した保護者同士で子育てについて、話し合うことが多くなった。

森の保育園

住田町立世田米保育園・住田町立有住保育園

【岩手県】

活動概要

- 対象 町内の保育園児（保育園単位での参加）
- 参加人数 令和元年度延べ138名
- 活動時期 年間で、各保育園年長組4回、世田米保育園年中組1回（延べ9回）
- 活動場所 種山ヶ原森林公園・遊林ランド種山
- 連携協力 住田町教育委員会（共催）、すみた森の案内人

背景・目的

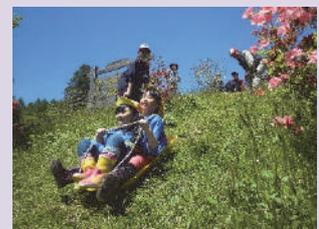
- 町では、森林が面積の約90%を占め、その豊富な森林資源を活かした様々な取組を行ってきたが、教育分野では、学校や地域でふるさとの森林や、主産業でもある林業について学ぶ機会が少なくなっていた。
- そこで15年程前から「住田町型の森林環境学習」の構築を開始し、保・小・中・高を通して系統的なプログラムの整備を行い、保育園児については、平成22年度以降、「森の保育園」を継続的に実施している。

主な取組

春・夏・秋・冬それぞれ「森の案内人」のガイドに従って、森林公園内の散策、自然を通しての遊びを実施。
春から秋は県立住田高校の高校生ボランティアが補助として参加。有住保育園では、冬は父母が参加している。

（活動の内容例）

- | | |
|---------|--------|
| 春：グラスソリ | 夏：沢遊び |
| 秋：木の実拾い | 冬：雪あそび |



特徴

「森の案内人」や高校生と一緒に、森の中で遊び、学ぶ季節に合わせて年4回実施し、「森の案内人」や高校生とともに、森の中で遊びながら、森林のことを学んでいる。
なお、毎回、担当の保育士が指導案を提示し、保育園、案内人、教育委員会担当で打合せ・下見を行い、活動内容等を検討した上で実施している。ボランティアとして参加する高校生についても、年度初めにガイダンスを行った上で、開催ごとに要綱を配布し、実施している。

成果・展望

園児たちは各回の参加を楽しみにしており、家庭でも準備や感想など話題にするようになっている。
各世代の森林環境学習の「スタート」として、子供たちの興味・関心を高める契機となっている。

家族ふれあい広場「われらネイパルファミリー ～お泊まり編～」 北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森【北海道】

活動概要

- 対象 県内の3歳以上小学2年生までの幼児・児童とその保護者
(ホームページの申込フォームから申込)
- 参加人数 55人【令和元年度】
- 活動時期 8月24日・25日(1泊2日)、6月と7月に日帰りの回を実施【令和元年度】
- 活動場所 北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森
- 連携協力 特になし

背景目的

- 体験活動は、子供たちの豊かな人間性の形成に重要であり、乳幼児期からの家庭や地域、自然の中での豊富な体験が重要であるという指摘があることから、「北海道教育推進計画(平成30年度～平成34年度)」では、道立青少年体験活動支援施設における未就学児(親子を含む)を対象とした事業の割合を毎年度20%と目標指数を示し、全施設で取組を行っている。
- 当該事業は、親子で自然と触れ合う活動を通して、幼児の自立心の芽生えを促すとともに、家族間の交流や親子の絆を深め、家庭教育の充実を図ることを趣旨として実施した。

主な取組

親子別活動では、子供は6月・7月の回で体験してきたバルシューレ(ボール遊び)などを行い、保護者は「遊びと子供の望ましい生活習慣の定着」をテーマに意見交流を行った。星空観察やピザ作りなどは、保護者に丁寧に説明を行い、親子での対話を通じたふれあいが数多く設定できるようにした。

(活動内容)

- 「仲良くなろう!」: 参加者、ボランティアとのレクリエーション
- 「森で遊ぼう!」: 葉や木の美のアート作り、焚き火
- 「語ろう!」: 保護者向け、「遊び」をテーマに懇談会
- 「楽しもう!」: 子供向け、ピザ作りに向けたレクリエーション
- 「夏の夜をまったり過ごそう!」: 星空観察と読み聞かせ
- 「ピザをつくろう!」: 家族で窯焼きピザ作り



特徴

五感を使って自然を感じる経験により子供の自立心の芽生えを促す

ネイチャーゲームや焚き火など、子供たちが「五感を使って自然を感じながら活動できること」や、「親子で触れ合いながら活動できること」を視点に取組内容を工夫。

6月・7月の回は「親子と一緒に楽しむ」を視点に実施したが、8月は親子別活動を設定し、子供の自立心を促すプログラムとした。

成果・展望

親子で対話を通して触れ合う場面を数多く設定することができ、その効果からか、子供たちが積極的に活動し、参加者アンケートでは「普段よりも積極的にお手伝いをしてくれた」と回答した家庭が多く見られた。

「親と離れたところで元気に活動する子供の様子を見て、成長を感じられた」という感想も見られた。

鬼っこわんぱく講座 鬼剣舞体験

北上市立鬼の館

【岩手県】

活動概要

- 対象 市内の4歳児～小学生（市広報や市ホームページに募集要項を掲載）
- 参加人数 定員16人
- 活動時期 夏：7月～8月（全6回講座）、冬：1月～2月（全6回講座）
- 活動場所 北上市立鬼の館
- 連携協力 岩崎鬼剣舞保存会

背景目的

- 北上地域に伝承される民俗芸能「鬼剣舞」の演目を習得し、発表することで、後継者育成活動に対する意識の高揚を図ることを目的として実施。（事業は平成8年度より実施）
- 鬼剣舞は念仏を唱えながら舞う念仏踊りの1つで、踊り手は鬼のような威圧的な面を着け、賑やかに奏でられる囃子に合わせ、刀や扇を持って踊るもの。

主な取組

岩崎鬼剣舞保存会の指導の下、夏季と冬季に、民俗芸能「鬼剣舞」を5回練習し、衣装を着けて発表をする。

全6回の講座が受講できない子供たちのために、練習の様子を見学し体験する「ちよっぴり見学・体験会」も開催している。

7月～8月のプログラム（練習：5回、発表会：1回）

鬼剣舞の演目「三番庭の狂い」を習得し、発表する。

1月～2月のプログラム（練習：5回、発表会：1回）

鬼剣舞の演目「刀剣舞の狂い」を習得し、発表する。



特徴

多世代の交流の中で民俗芸能を学ぶ

岩崎鬼剣舞保存会の方が指導することで、受講者一人一人にきめ細かな指導を行うことができる。子供たちが理解しやすいように指導方法を工夫している。

また、4歳児から小学生までと受講生に年齢差はあるが、小学生の子供たちが練習時にリーダーシップを発揮し、未就学児のサポートを行うようになるなど、幼児と児童間の交流も見られる。

成果・展望

鬼剣舞に興味関心を持つ子供たちが参加することで、伝承活動の幅が広がっている。

地域子ども教室 田んぼの学校

御嵩公民館

【岐阜県】

活動概要

- 対象 誰でも（親子で参加、子どもだけでも参加可）（町広報誌、公民館回覧で募集）
- 参加人数 子ども延べ136人（うち、幼児53人）、大人延べ108人【令和元年度】
- 活動時期 5月19日、6月2日、6月16日、8月18日、10月13日、11月2日の計6回【令和元年度】
- 活動場所 御嵩公民館、公民館周辺の田んぼ
- 連携協力 特になし

背景目的

- 平成14年開校。学校週休2日制により土曜日に子どもたちが地域で過ごすことから、子どもたちの健全育成の一環として実施。
- 「アイガモ農法を通じて安全な米作りを学んで欲しい」、「バケツ稲作を通じて長い期間にわたり世話をすることにより根気を養う」、「農家の労働の苦しみを経験した後の収穫の楽しみを味わって欲しい」等を目的として実施している。

主な取組

バケツ稲作りから、稲刈りまで、年間を通じて米作り体験をする。

環境に配慮したアイガモ農法でもち米を栽培し、カモが雑草や害虫を食べ、そのフンが有機肥料となることなどを学ぶ。

（活動の内容）

- | | |
|--------------|-----------|
| ① 開校式・バケツ稲作り | ② 田植え |
| ③ 放鳥 | ④ 草取り |
| ⑤ 稲刈り | ⑥ 修了式・収穫祭 |



特徴

活動を通じて、町民と地域とを結び付け、子どもたちの豊かな成長を育てていく

アイガモ農法による米作りを体験し、農業・環境のことについて学んでいる。また、活動の中では、ドローンを使用する近代農業についても紹介をしている。

活動が、子どもたちの成長を育む場に、また、町民と地域とを結び付ける機会になっている。



成果・展望

自然に親しみ家族と一緒に絆を深める機会になっている。また、この地方に伝わる「刈りかべの祝」（米の収穫のお祝い）や「植え付けごもり」（田植え終了後の行事）など地域の伝統や文化に触れる機会になっている。アイガモ農法を通じて、生命の大切さや環境について関心を持つ機会になっている。

たねさし 星のW☆RLD ～春・夏・秋・冬物語～

青森県立種差少年自然の家

【青森県】

活動概要

- 対象 幼児を含め誰でも（幼児・児童生徒は保護者同伴）
（開催要項及びチラシを小学校、児童館、保育園、幼稚園、公民館に配布）
- 参加人数 定員30人
- 活動時期 5月、7月、11月、3月
- 活動場所 青森県立種差少年自然の家
- 連携協力 三八五グリーンネット（指定管理者）、八戸市児童科学館

背景・目的

- 親子で星空観察を通し、親子の体験活動等の機会を提供し、心豊かな子供たちの成長を図り、親子の絆を深めることを目的として実施。（平成28年度より実施）
- 青森県立種差少年自然の家の天体望遠鏡を使用し、季節の星座を観察することにより、星や星座に興味関心を持たせ、「自然の大切さ」を体感させる。

主な取組

望遠鏡で恒星を観察する体験を通じて、星に興味を持ってもらう。
身近な星座を簡単に見つけるようなアドバイスをしながら、10～15分で当日見える恒星等をプロジェクターを使って解説し、20～30分で自然の家の屋上で望遠鏡を使い、観察を行う。

（活動の内容※秋の会の内容例）

- 1 星空の解説
- 2 星空の観察（屋上）
 - ①秋の星座
 - ②秋の四辺形
 - ③惑星：土星
 - ④月
 - ⑤二重星：アルマク



特徴

星の観察を通じて、親子の絆を深める

誰でも参加できる活動であるが、幼児・児童生徒が参加する場合には、保護者とともに参加。活動後も、家族で星を見るきっかけを作ることをねらいとしている。リピーターとして季節ごとに参加する人も見られる。

今後は、天体望遠鏡作りを通じて、自宅でも日常的に天体観察ができるように、検討を行っている。

成果・展望

星座観察や星座物語を通して、天体に興味・関心を持つ子供たちや保護者が増え、恒星観察の他、流星群観測等の希望も寄せられている。
また、「このイベントを通して、親子の会話が増え、絆が深まった」などの感想も多くなっている。

親子自然観察会

小豆島自然観察会

【香川県】

活動概要

- 対象 町内の幼児～中学生、保護者（各園・各校へチラシ配布、小豆郡内2町の広報誌に掲載）
- 参加人数 定員30人程度（近年の状況として、参加幼児は約10～15人）
- 活動時期 年に4回、四季に合わせて実施（活動時間は半日程度）
- 活動場所 小豆郡内
- 連携協力 土庄町

背景目的

- 小豆郡内の自然を観察しながら親子で体験活動をし、郷土のよさを再発見しようというねらいで、平成6年夏以来継続して行っている。
- 主催団体である小豆島自然観察会では、会員の自然に対する資質向上を図るとともに、行事を通して島民への自然保護思想の普及啓発を目的に「親子自然観察会」や「出前講座」などの活動を実施している。

主な取組

年に4回、季節に応じたプログラムを主催団体が考え、活動を実施。

主催団体会員以外にも、その分野で詳しい人に声をかけ、何回参加しても参加者が新しい発見ができるよう工夫している。

（活動内容）

冬：冬鳥をさがそう（平成31年2月）

春：春の植物を観察しよう！食べよう！（平成31年4月）

夏：夜の昆虫を観察しよう！（令和元年8月）

秋：銚子溪で秋さがし♪（令和元年11月）



特徴

小豆島の自然の中で自然観察をしながら、親子で触れ合うことができる

近年は大半が幼児を連れての参加となっている。

参加親子の状況を見て主催団体がプログラムを考慮しており、幼児も小学生の参加者と同様、主体的に活動している。

保護者も参加幼児とともに屋外活動を楽しむことができる。

成果・展望

感想ハガキにより、発見・驚きが絵や文章で寄せられており、会報にて紹介している。

また、日頃、自然と触れ楽しむことが少なくなっている大人も我が子とともに楽しみリフレッシュしている様子が見られる。

孀恋クリーン大作戦

孀恋村青少年育成推進員連絡協議会

【群馬県】

活動概要

- 対象 村内の幼児～中学生（親子）（村内幼稚園、小学校、中学校へチラシの配布）
- 参加人数 村内の幼児～中学生の親子25組（うち、幼児の参加6人【令和元年度】）
- 活動時期 5月下旬～6月上旬頃、年1回開催
- 活動場所 バラギ高原キャンプ場
- 連携協力 孀恋村教育委員会、群馬県立孀恋高等学校JRC部（Junior Red Cross部）

背景目的

- 子供の居場所作りの場として、また、地域の大人たち（青少年育成推進員）との異世代間の交流を通して青少年の社会活動への積極的な参加や社会性を身に付けさせる事を目的とする。
- また、地域の美化保全により子供たちの環境保全・ボランティア精神を養成する。（平成14年度より実施）

主な取組

「孀恋クリーン大作戦」として、清掃活動と、昼食作りを実施。清掃活動では、7月上旬に開催の孀恋高原キャベツマラソン大会のコース一部のゴミ拾いを実施。昼食作りでは、火起こしをしてから飯盒でご飯を炊いたり、カレーを作ったりしている。幼児は、昼食作りでは食材を水で洗ったり、ピーラーで皮をむいたりする。包丁の使用や火起こしを体験したい場合は保護者や周りにいる大人と一緒に安全面に留意しながら取り組んでいる。



特徴

異世代間の交流の中で、「社会活動への積極的な参加」や「社会性を身に付けさせる」きっかけをつくる

孀恋高等学校JRC部の生徒との交流もあり、「青少年育成推進員、他参加者の保護者、参加しているお兄さん、お姉さんとの異世代間の交流」や、「普段の生活では経験できない体験活動」、「自分たちでゴミ拾いをしてきれいになった道路を見たり、拾ったゴミの量を見たりして達成感や満足感を味わう」などの経験ができています。



成果・展望

活動中、幼児と青少年育成推進員・高校生等との異世代間の交流が図れている。また、毎年参加する方に加え、新たに参加する方もいるなど、地域の活動に数多くの方が参加している。幼児が参加することで自然や社会の中など様々な体験をすることができるだけでなく、社会活動への参加のきっかけになっていると考えられる。

調査研究協力者

本事例集の作成に当たっては、下記の4名の方に御協力・御助言をいただきました。

(50音順)

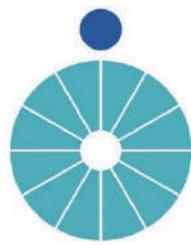
- | | |
|--------|--------------------------------|
| 青木 康太郎 | 國學院大學人間開発学部 准教授 |
| 小林 真一 | 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 参事・広域主幹 |
| 林 大介 | 首都大学東京 特任准教授 |
| 結城 恵 | 群馬大学大学教育・学生支援機構 教授 |

令和元年度青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」
青少年の体験活動等の推進に関する調査研究 事例集

今後の社会の変化に対応した多様な体験活動事例集

令和2年3月発行

発行 文部科学省
担当 総合教育政策局地域学習推進課
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
電話03-5253-4111（代表）
作成 株式会社浜銀総合研究所 地域戦略研究部



文部科学省

MEXT

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN